



第71回全国高等学校PTA連合会大会



石川大会

大会会報



金沢駅・鼓門

いしずえ
輝く未来への礎

～親から始める新時代の教育～

令和4年8月25日(木)・26日(金)

主催／一般社団法人 全国高等学校PTA連合会 主管／石川県高等学校PTA連合会



2022石川大会 巻頭言



第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会を終えて

第71回全国高等学校PTA連合会大会
石川大会実行委員長 栗田 真人

第71回全国高等学校PTA連合会大会2022石川大会にご参加いただいた、全国のPTA会員の皆様へ、コロナ禍第7波の中、万難を排して石川県に起こしただいたこと、また、残念ながらご来県いただけなくてもオンラインで視聴いただけましたこと、本当にありがとうございました。無事大会全日程を終了することができたことを報告できることが、私たち石川大会実行委員会一同の一番の喜びです。

3年ぶりに会場に一堂に会しての全国大会開催が実現できたことを踏まえ、PTA活動や全国大会のことについて感じたことを記します。

今、わが国は安全保障・経済・社会保障といった国政の重要課題において様々な面で歴史的分岐点に立っていると感じます。このことは教育の分野においても同じです。

本大会の4つの分科会では「新時代」というキーワードで学校教育・家庭教育・キャリアデザイン・進路選択の各分野について講演者・パネリストの方々からたくさんのご報告・ご提案をいただきました。総じていえることは、特に私たち保護者の年代で受けてきた教育から大きく価値観を変える必要があること、そして他者との違いをおそれずに、自らが積極的に考え、発言し、主体的に決断する人材を教育していくという大きな方向性に、保護者自身がいかに真剣に向き合い、自分たちの子、そして教育現場に向き合えるかという問題提起であったように思います。このように文章にしてしまうと当たり前のように感じられますが、いざ実践しようとするとなかなか手強いものであると思います。

澤田貴司様の記念講演においては、経済人としてのダイナミックな活動のご経験をお話いただき、これからの人生を考える上で、小さくとどまっている場合ではないという危機感にも似た実感を私個人は受けました。

本大会において参加・視聴いただいた皆様が、それぞれの価値観、あるいはこれか

らの教育、あるいは自らの人生に何らか変化をもたらす気づきを得ていただき、何かを新しく始めるきっかけとしていただいたとしたら、企画実行にあたった立場としてはそれ以上のありがたいことはありません。

ウィズコロナの時代になり、数千人がこのように一堂に会して行うシンポジウムや大会の開催意義も益々問われることになりました。いかに簡単にネット上で会議や講演会が可能であるとしても、時間と費用をかけてわざわざ移動し一堂に会していただくことにはやはり意義があります。会場の熱気、画面ではなく会場で聞く際の心への響き方の違いもあるでしょう。アトラクションなどは生で体験していただく迫力は格段に違うものがあると思います。現役高校生が晴れ舞台で一生懸命に取り組んでいる姿を目の当たりにすることは、とても感動するものだと改めて実感しました。

各高単Pあるいは県や地区の地域ごとのPTA 会員が、丸2日間という長時間、行動を共にしていただくという時間は、地元にはなかなか持つことのできない貴重な時間であると思います。旅程や食事中など公式の会議では決して交わせない会話を通じて、さらに親近感が強くなり、個人の貴重な経験にもなり、各組織全体の活性化にもつながるのではないのでしょうか。

こういった企画書には現れない重要な価値を再認識できたことが3年ぶりのリアル全国大会を開催してみたの一番の実感であり、今後の全国大会開催に関する重要な引継事項になったように感じています。

最後になりましたが、本大会の開催にご協力をいただいた講演者・パネリスト・司会の方々など登壇者の皆様、ご祝辞をいただいた築文部科学副大臣様、馳石川県知事様、村山金沢市長様そしてご来賓の皆様、主催者としてご協力をいただいた全国高等学校PTA 連合会山田博章会長をはじめとする役員・事務局職員の皆様、そして運営・設営に多大な協力をいただいた株式会社JTB様、株式会社金沢舞台様、能登印刷株式会社様、多くの支援をいただいた自治体および協賛企業の皆様など、関係していただいた全ての皆様に感謝を申し上げます。無事成功裡に本大会を開催することができました。本当にありがとうございました。

そして、準備および大会当日に汗を流していただいた石川県高等学校PTA 連合会加盟校会員の皆様、実行委員会役員、実行委員会事務局職員の同士の皆様、本当にお疲れ様でした。このねぎらいの言葉を締めとして、実行委員長の報告とさせていただきます。

いつの日かコロナ禍を克服し遠慮なく笑い合える明るい社会が再び到来することを祈念して。

2022年8月25日(木)・26日(金)

第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会



目次

大会フォトギャラリー 4

開会式（式辞・祝辞）

大会会長式辞 24
祝辞 26
開会の挨拶 29

大会概要

大会概要 32
大会日程 33
式次第 34
大会役員名簿 35
実行委員会組織図 36

分科会

第1分科会 38
第2分科会 46
第3分科会 52
第4分科会 60

記念講演

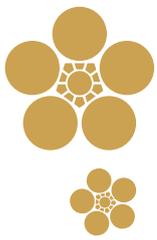
記念講演 64

閉会式

大会会長挨拶 78
次期開催地挨拶 79
閉会の挨拶 80

資料 82

編集後記 84



2022石川大会 開会式

●大会会長式辞



一般社団法人全国高等学校PTA連合会 会長

山田 博章

●実行委員長開会の挨拶



第71回全国高等学校PTA連合会大会
石川大会実行委員長

粟田 真人



● 来賓祝辞



文部科学副大臣

築 和生 様

● 来賓祝辞



石川県知事

馳 浩 様

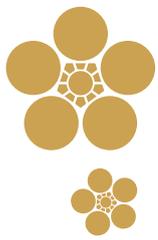
● 来賓祝辞



金沢市長

村山 卓 様





2022石川大会 表彰式

●令和4年度優良PTA 文部科学大臣表彰



代表 石川県立能登高等学校PTA (PTA会長 山下 栄治)

●令和4年度全国高等学校PTA 連合会会長表彰 [個人の部]



代表 石川県立田鶴浜高等学校PTA
前PTA会長 杉本 由香里

[団体の部]



代表 石川県立野々市明倫高等学校PTA
(PTA会長 栗山 伴芳)

[役員等の部]



代表 一般社団法人全国高等学校PTA連合会
前会長 泉 満

[受賞者代表謝辞]



一般社団法人全国高等学校PTA連合会
前会長 泉 満

●特別感謝状

第70回全国大会開催地に対する特別感謝状受賞団体



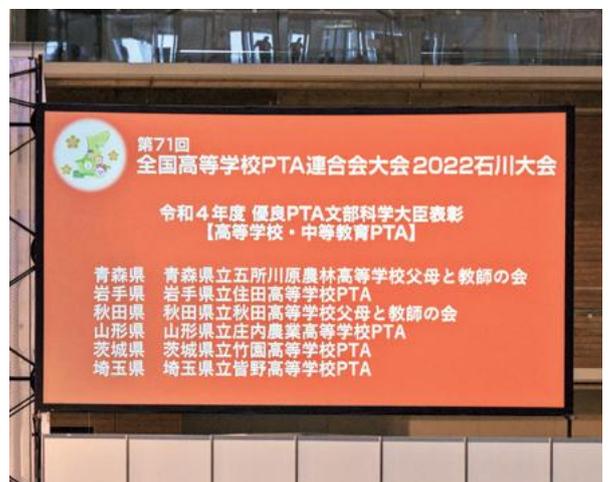
島根県高等学校PTA連合会 (前事務局長 勝部 昌幸)



第70回全国大会開催地実行委員会会長に対する特別感謝状受賞者



第70回全国大会島根大会実行委員会会長 大屋 光宏

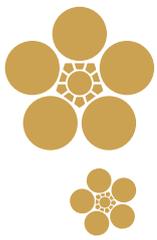




2022石川大会 開会式スナップ







2022石川大会 第1分科会

●新時代の家庭教育 ～今、伸ばすべき本当に必要な力～



第71回全国高等学校PTA連合会大会2022石川大会
主催：一般社団法人全国高等学校PTA連合会 主賓：石川県高等学校PTA連合会



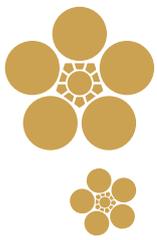
第71回全国高等学校PTA連合会大会2022石川大会
主賓：一般社団法人全国高等学校PTA連合会 主催：石川県高等学校PTA連合会



2022石川大会 第2分科会

●新時代の学校教育 ～学習意欲を高める個別最適化、協働的な学び～





2022石川大会 第3分科会

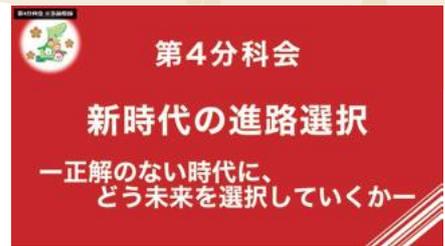
●新時代のキャリアデザイン ～ローカルキャリアが育む未来の働き方・生き方～



2022石川大会 第4分科会 (オンライン配信)

●新時代の進路選択

～正解のない時代に、どう未来を選択していくか～



小宮山 利恵子 氏
 スタディサプリ教育AI研究所所長
 国立大学法人東京学芸大学大学院准教授

1977年東京都生まれ。
 早稲田大学大学院修了後、東洋館、
 ベネッセを経て2015年リクルート入社、現職。
 東京工業大学リーダーシップ教育院、
 「教育におけるICT活用促進をめざす議員連盟」、
 ANA、熊本県八代市などのアドバイザー、
 その他経団連EdTech戦略検討会会長等



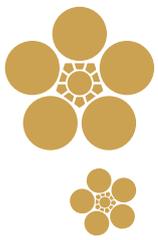
第7回全国高等学校PTA連合会
2022石川大会
 第4分科会 基調講演 II
**これからの社会を生き抜く
 子どもたちのために
 保護者に求められていること**

リクルート「キャリアガイダンス」編集長
 国立大学法人東京学芸大学客員准教授 **赤土 豪一 氏**

赤土 豪一 氏
 リクルート「キャリアガイダンス」編集長
 国立大学法人東京学芸大学客員准教授

1984年大阪府生まれ。早稲田大学大学院
 教育学研究科ビジネス専攻 (MBA) 修了。
 新卒で株式会社ベネッセコーポレーションへ入社。
 マーケティング/教材開発に従事。その後、
 リクルートへ転職。以降、アナログ/デジタルを
 問わず、一貫してスタディサプリにおける高校生向け
 キャリア教育プログラムの開発に従事。





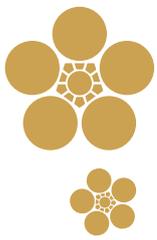
2022石川大会 アトラクション

● 遊学館高等学校 バトントワリング部



●石川県立金沢桜丘高等学校 箏曲部





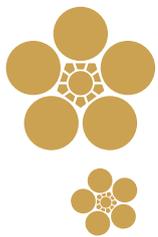
2022石川大会 アトラクション

●石川県立金沢二水高等学校 合唱部



●石川県立小松明峰高等学校 吹奏楽部





2022石川大会 記念講演

演題「やりたいことをやる」

講師 澤田 貴司 氏
((株)ファミリーマート顧問・前副会長・元社長)



2022石川大会 閉会式

●大会会長挨拶



一般社団法人全国高等学校PTA連合会 会長

山田 博章

●実行委員長挨拶



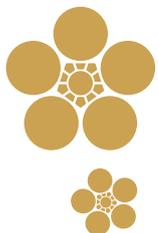
第71回全国高等学校PTA連合会大会
石川大会実行委員長

栗田 真人



●全国高P連旗返還・授与





2022石川大会 閉会式

●次期開催地挨拶・パフォーマンス



第72回全国高等学校PTA連合会大会
宮城大会実行委員長

町田 さやか



●閉会式スナップ



2022石川大会 大会スナップ

1年前



大会当日





2022石川大会

大会スナップ



第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

開会式(式辞・祝辞)

(8月25日(木))



兼六園・ことじ灯籠

いしずえ
輝く未来への礎
～親から始める新時代の教育～



一般社団法人全国高等学校PTA連合会 会長

やまだ ひろあき
山田 博章

石川県の皆さん、そして全国の皆さん、
こんにちは。

また、本日は、馳 石川県知事をはじめ、
ご来賓の皆様方に於かれましては、公私と
もご多忙の中、ご臨席を賜り、厚く御礼申
上げます。

さらに、先日来よりここ石川県をはじめ、
全国各地を襲っております、豪雨による土
砂災害や河川の氾濫などの、被害に遭われ
た皆様方に於かれましては、心よりお見舞
い申し上げ、一刻も早い復旧を、心よりお
祈り申し上げます。

さて申し遅れましたが、私、先程ご紹
介頂きました、令和4年度の全国高等学校
PTA 連合会の会長に選任されました「山
田」と申します。どうぞ宜しく願い申し
上げます。ちなみに、出身は、近畿の和歌
山県です。

本日、全国各地から、様々な様式でご参
加をされております会員の皆様方に於かれ
ましては、日頃のPTA活動へのご尽力と、
ご理解ご支援を賜っております事、心より
感謝を申し上げます。約2年半前に発生し
た「新型コロナウイルス感染症」という得体のしれ

ないウイルスに振り回され、前回の島根大
会も一昨年は延期、昨年はリアル開催とオ
ンライン開催によるハイブリッド形式によ
る全国大会を計画しておりましたが、開催
寸前に感染拡大の第5波に襲われたことに
より、残念ながらほぼ無観客のオンライン
のみの開催となってしまいました。今年は
万難を排しての石川大会ということで、関
係各位の感慨もひとしおかと、拝察申し上
げます。

今回、大会の開催地となった石川県は、
加賀藩前田家百万石のおひぎ元として、独
自の文化が花開いた情緒ある城下町である
とともに、日本海の海の幸にも恵まれた、
自然豊かな日本有数の温泉郷でもあります。
心と体を癒やすのに最適なこの地から発信
されたテーマと志は、皆様の心に深く刻ま
れ、忘れがたい印象を残してくれることと
確信を致しております。

さて、今回の石川大会のメインテーマは
「輝く未来への礎」、サブテーマには「親か
ら始める新時代の教育」と謳われておりま
す。親というものは、希望に満ち溢れて未
来へと羽ばたいて行こうとしている子ども



達を、陰日向無く、常に応援し続ける存在でありたいと思っておりますが、昨今インターネットやICTの進化により、目まぐるしい速さで変化する世の中にあっては、それを実現するのは、なかなか困難になってきているのが実情ではないでしょうか。

少子高齢化や核家族化による社会構造の変化、地域に於けるつながりの希薄化等、家庭を巡る状況の変化の中に於いて、人への思いやりや主体性の育成など、本来は主に家庭がその役割を担っていたものが、^{今日}今日では学校に委ねられるようになり、その依存度は益々大きくなってきております。

またその一方で、各家庭に於ける教育は、それぞれの価値観やライフスタイルに基づいて多様化が増えてきており、また、親の過保護や過干渉、多感な思春期の子育てへの自信の喪失、無責任な放任、そして急変する社会環境への不安等、様々な問題が生じてきております。

更に、今年の4月1日から、成人の年齢が18歳に引き下げられたことから、契約に対する責任や、消費者被害等々、様々な事柄が子ども達に新しくのしかかって来ており、物事を正しく認識しトラブルを回避するには、徐々にではありますが、子ども達の自立を促していく必要性にも迫られてきております。しかしながら、そのためには、キャリア観や規範意識の醸成、政治的教養教育の推進、消費者教育や金融教育の充実、インターネットリテラシーの向上等々が不可欠であり、これら多くの要請が高校の教育現場に寄せられていますが、そ

れらは高校教職員のみが担うのではなく、社会全体が当事者意識をもってそれぞれの役割を果たすべきであると考えます。

私たちはPとT、つまり「保護者・家庭」と「教職員」が協働する団体であり、子ども達の自立と幸福を願う想いを同じくする同志です。PとTがしっかりとベクトルを合わせ手を携えて、子ども達の自立を支援する事を目標にして、活動をしていきましょう。

最後になりましたが、「全国高等学校PTA 連合会大会石川大会」の開催に当り、ご尽力くださいました石川大会実行委員会、文部科学省はじめ石川県、金沢市など関係各位に深甚なる感謝を申し上げますとともに、本大会に様々な形で参加されました皆様、本大会に於ける研究協議を通して、多くの学びと気付きを得て、今後の各校に於ける、持続可能なPTA活動の更なる発展に活かしていただくよう祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

今日、明日の二日間、皆さん、よろしくお願いたします。





文部科学副大臣

やな かず お
籙 和生 様

皆さん、こんにちは。文部科学副大臣の籙和生です。本日ここに、第71回全国高等学校PTA 連合会大会が開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

皆様におかれましては、コロナの影響が長期化する中、感染対策を徹底しながら、PTA 活動に取り組まれ、我が国の未来を担う子供たちの健全育成に御尽力いただいておりますことに、深く敬意を表しますとともに、心より感謝を申し上げます。

高等学校については、大きな改革が進行中です。今年度から、高等学校等において新学習指導要領が年次進行で実施されるとともに、高等学校等の特色化・魅力化に向けた改革が本格的にスタートしたところです。

同時に、成年年齢が20歳から18歳に引き下げられ、高校生が、主体的に社会の形成に参画するために必要な力を身に付けていくことが一層求められています。

こうした流れを加速するため、地域や企業の力を巻き込んだ学校運営に向けたコミュニティ・スクールの導入などの取組も併せて進めてまいります。

これからの活力ある社会を創っていくた

めには、学校のみならず社会総掛かりでの教育を実現することが大事です。学校・家庭・地域の連携がこれまで以上に求められます。PTA の皆様方におかれましては、是非、本大会のテーマである「輝く未来への礎」として、これからも御力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本大会が皆様にとって実りあるものとなることをご期待申し上げますとともに、一般社団法人全国高等学校PTA 連合会のますますの御発展と、皆様の一層の御活躍をお祈り申し上げまして、私からの挨拶といたします。





石川県知事

はせ
馳

ひろし
浩 様

皆さん、こんにちは。石川県知事の馳でございます。

3年ぶりに全国のPTA会員の皆様が一堂に会し、「第71回全国高等学校PTA連合会大会石川大会」が、ここ金沢市で盛大に開催されますことをお慶び申し上げますとともに、全国各地からご来県いただいた皆様に、心から歓迎いたします。

また、本大会の開催にご尽力された全国高等学校PTA連合会や石川大会実行委員会の皆様をはじめ、関係の皆様方に深く敬意を表します。

そして、この後表彰を受けられる方々をはじめ、本日ご参集の皆様方におかれましては、日頃から、高等学校におけるPTA活動を通じ、学校、家庭、地域の架け橋として、ご自身のお子様のみならず、全ての子供たちの健全育成にご尽力いただいていることに深く感謝を申し上げます。

さて、コロナ禍にあっても、少子高齢化や人口減少に加え、いじめ・不登校問題の深刻化、AIやIoTといったデジタル化の一層の進展など、教育を取り巻く環境は日々変化し、様々な課題が生じています。

本大会のメインテーマは「輝く未来への礎」とお聞きしていますが、まさに今、この複雑な時代において、教育には、明るい未来を信じ、たくましく生き抜く人材を育てることが期待されていると認識しています。

私自身、石川県知事に就任する前も、教員として、また国会議員として、皆様の声をお聞きしながら様々な課題に取り組んでまいりましたが、今後とも、PTAをはじめとする保護者の皆様や学校、地域とともに、全ての子供たちの成長をしっかりと支えてまいりたいと考えています。

全国各地からお集まりの皆様方におかれましても、ここ石川の地で、分科会等での意見交換はもとより、夜は本県ならではの新鮮な海山の幸や金沢おでんを囲みながら、地域を越えた交流を深められ、PTA活動の輪が一層広がり、日本の将来を支える人材の育成につながっていくことを願っています。

最後に、この石川大会の開催にあたり、多大なご尽力を賜りました関係の皆様方に重ねて感謝を申し上げますとともに、本大会のご盛会と、ご出席の皆様方の今後ますますのご活躍を祈念申し上げ、お祝いと歓迎のご挨拶とさせていただきます。





金沢市長

むらやま たかし
村山 卓 様

第71回全国高等学校PTA 連合会大会 2022 石川大会の開会に当たり、開催地であります金沢市を代表してごあいさつ申し上げます。本日は全国から多くの皆様に本市へお越しいただきまして、厚く御礼申し上げますとともに、心より歓迎申し上げます。本大会が皆様一堂に会して開催されるのは3年ぶりとお聞きしております。コロナ禍の中、初のハイブリット開催を敢行されるなど、皆様の工夫とご精進の賜物と、心より敬意を表するものです。

さて、本大会のテーマ「輝く未来への礎～親から始める新時代の教育～」を拝見し、皆様の今大会に向ける真摯な気持ちに触れた思いであります。世界を襲った未曾有のパンデミックにより、私たちの社会がさらされている変革に、ますます拍車がかかったと感じます。皆様が日頃、ご家庭や学校で接している子供たちは、まさに「デジタル・ネイティブ」世代として、このような社会の変動にしなやかに対応しているように見える中、大人の方こそ、もう一度学び直し、社会のあり方に向き合わなければならないのかもしれない。参加者の皆様で

学びの場を共有できる3年ぶりのこの機会が、実りの多いものとなりますよう、ご期待申し上げます。また、日程の合間には、お時間の許す限り市内各所のご訪問、ご散策をお楽しみいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本日ご参加の皆様のご健康と、全国高等学校PTA 連合会のみまますのご発展を祈念いたしまして、ごあいさつといたします。





第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会実行委員長

あわだ まさと
栗田 真人

皆さま、こんにちは。そして、3年ぶりのリアル開催になりましたこのPTA全国大会が開催される石川・金沢の地にこのように大勢の方にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。まずは感謝を申し上げます。

まだまだコロナ禍、第7波といわれている感染症の状況が、全国的に収束していない中がございます。そんな中、われわれ実行委員会の方からこの石川大会、石川の地に来てくださいというご案内を差し上げまして、中にはやはり各校のご実情からこの場においていただくことがかなわず、現在ないし後日、リアルではなくオンラインでご視聴いただくという選択をされた高校もたくさんございます。そうであっても、われわれとしてはこの場に来られた方と同様に、何か気付きを持ち帰っていただくような全国大会、分科会そして記念講演、記念式典を執り行いたいたいと、今日まで約3年間、懸命に準備をしてまいりました。準備を始めて間もなく、令和2年初頭にコロナ禍が発生してしまいました。1年間の延期の後、昨年の島根大会は、島根県の皆さ

まには完全なオンライン開催という形を残していただきました。それを受けて私たち石川大会の実行委員会は、何としても皆さんにもう一度こうして一堂に集っていただきたいという願いを込めまして、これまで設営準備に懸命に取り組ませていただきました。

今回の大会の一つのテーマといたしまして、「新時代」というキーワードを盛り込ませていただきました。若干個人的な話をするをお許しいただきたいのですが、私自身が高校生だったのは30～33年前ぐらいになるのですけれども、その頃は共通一次試験という大学入学試験の時代で、私は初めて大学入試センター試験というものを受けた一期生でございます。当時は石川県内の進学校といわれるところに通わせていただいていたけれども、大学に進学すること、偏差値教育ということに自分自身あまり疑問を持たずに高校時代を過ごした記憶がございます。翻って30年たった現在、自分の子どもの高校生活を経験させていただきまして、やはり大きく時代は変わっていると実感いたしました。



た。本当にいろいろな人生の選択肢があるのだということを先生方にも教えていただいているということを実感する一方で、自分に何がふさわしいのかということがなかなか見だしにくい子どもたちも増えているのではないかとこのふうにも感じているところです。

今回、分科会で四つのテーマを設定させていただきましたけれども、今日お集まりのPTAの保護者・教職員の皆さま、何か少しでも今後のお子さま方の教育に関して気付いていただける、何か持ち帰っていただけることを、ちょっとでも得ていただければ、われわれ設営者側としては本当に幸いです。

なぜこうやって全国大会という形で一堂に集まらなければいけないのかという問いも、実はあるやに聞いております。オンラインの時代になりまして、いろんな研修なり会議なりが、ZoomやTeamsなどを用いたオンライン会議が主流になってきているのではないかと思います。そんな中、こうやって一堂に会していただくことの意義が

やはりあるのだろうというふうに思います。私の挨拶にも書かせていただきましたけれども、集って忌憚のない意見を言い合って、そして遠慮なく笑い合える。この2年間、なかなかそういったことができなかつたと思います。学校現場では特にそうだったのではないかと思いますけれども、今回の全国大会を契機に、一日でも早くそういった元の明るい日常が戻ることも祈念したいと思います。

何はともあれ今日と明日の2日間、石川の地を存分に堪能いただきまして、この全国大会が皆さまにとって有意義な時間になることをお祈り申し上げまして、実行委員長の最初の挨拶とさせていただきます。今日と明日、どうぞよろしく願いいたします。



第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

大会概要



ひがし茶屋街

いしずえ
輝く未来への礎
～親から始める新時代の教育～



第71回全国高等学校PTA 連合会大会『石川大会』概要

メインテーマ **「輝く未来への礎」** サブテーマ **～親から始める新時代の教育～**

【大会趣旨】

世界を震撼させてきたパンデミックは、私たちが作り上げてきた社会があまりにも脆弱で、日常当たり前に行っていたことができなくなり、今までの環境が実はどれだけ有難いことだったかを気付かせました。さらに、インターネットを活用した働き方や授業等、ニューノーマル(新しい日常)への移行を急加速させました。今後も頻繁に起こり得る気候変動や大震災、新型ウィルスの流行など、それまでの常識を覆す新たな事態に対応していくためには、人と人とが直接会えなくても、ネットワーク媒体を介してしか会話ができなくても、その繋がりの中から持続可能な共生社会を築くことのできる意識変革、社会構造の変革に取り組みつける必要があります、そのような視点でも教育を考えていかなければなりません。

石川大会では、「輝く未来への礎」をテーマとしました。わが国の若者が抱える課題として以前から「自己肯定感が低い」、「消極的で内向き志向」といった点が指摘されてきました。これについてはすでに学校でも改革が進められているところですが、子どもの自立に最も責任を負うべき親自身がまずは真剣に向き合うべき課題です。“子は親の鏡”と言われる。まずは親自身が子どもにこうあって欲しいと願う姿を親の背中で見せ、道標となることが求められているのです。

新時代の教育とは、まず私たち親が希望の持てる未来社会へのビジョンを持ち、自らが未来への礎となって主体的に行動し始めることであり、それが教育改革を進める学校を後押しし、地域社会、わが国そして世界の発展につながるものと信じます。

石川県は、古より東西文化を繋ぐ回廊として発展してきた加賀、里山里海と呼ばれる豊かな自然に恵まれた能登からなる県です。ここでは様々な地域の人と人とが縁を結び、心を紡ぐことによって、独自の文化を伝承、創造してきました。出会いこそが文化ともいえるここ石川の地に全国のPTA会員が3年ぶりに一堂に会し、輝く未来への礎のため、共に一歩前に踏み出しましょう。

【大会概要】

- 大会期日 令和4年8月25日(木)・26日(金)
- 開催場所 「いしかわ総合スポーツセンター」及び「石川県産業展示館4号館」
- 主催 一般社団法人全国高等学校PTA連合会
- 主管 石川県高等学校PTA連合会
- 後援 文部科学省、全国高等学校長協会、北信越地区高等学校PTA連合会、石川県、石川県教育委員会、金沢市、金沢市教育委員会、石川県高等学校長協会、石川県高等学校教頭・副校長会、公益財団法人日本教育公務員弘済会石川支部、石川県商工会議所連合会、石川県商工会連合会、大学コンソーシアム石川、NHK金沢放送局、MRO北陸放送、テレビ金沢、石川テレビ、HAB北陸朝日放送、朝日新聞金沢総局、読売新聞北陸支社、毎日新聞北陸総局、北陸中日新聞、北國新聞社



大会日程

●8月25日(木) ……大会1日目

時 間	行 事	会場	オンライン参加	
			当日	後日
11:30～	受付			
12:50～12:55 13:00～13:20 13:00～13:20	アトラクション①			
	遊学館高等学校 バトントワリング部	会場1 ^(※)	○	○
	石川県立金沢桜丘高等学校 箏曲部	会場2	×	○
13:00～13:20	石川県立金沢二水高等学校 合唱部	会場3	○	○
13:30～14:30	開会式・表彰式	会場1 ^(※)	○	○
14:40～17:00	第1分科会 新時代の家庭教育 ～今、伸ばすべき本当に必要な力～ 【講演Ⅰ】中室牧子氏 慶應義塾大学総合政策学部教授/ (公財) 東京財団政策研究所 研究主幹 【講演Ⅱ】高濱正伸氏 花まる学習会代表/NPO法人子育て応援隊むぎぐみ理事長	会場1	×	○
	第2分科会 新時代の学校教育 ～学習意欲を高める個別最適化、協働的な学び～ 【基調講演Ⅰ】浅野大介氏 経済産業省 経済産業政策局 産業資金課長 【基調講演Ⅱ】合田哲雄氏 内閣府(科学技術・イノベーション推進事務局) 審議官 【パネルディスカッション】	会場2	×	○
	第3分科会 新時代のキャリアデザイン ～ローカルキャリアが育む未来の働き方・生き方～ 【基調講演】石井重成氏 青森大学准教授、地域人材共創機構代表理事、総務省地域情報化アドバイザー 【パネルディスカッション】 (パネリスト) 岩本 悠氏 一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事 古屋星斗氏 リクルートワークス研究所・研究員 ほか	会場3	×	○
	第4分科会(全国高P 主管:リクルート) 新時代の進路選択 ～正解のない時代に、どう未来を選択していくか～ 【基調講演Ⅰ】小宮山利恵子氏 スタディサプリ教育AI研究所所長/東京学芸大学大学院准教授 【基調講演Ⅱ】赤土豪一氏 リクルート「キャリアガイダンス」編集長	録画配信		○

●8月26日(金) ……大会2日目(副会場は会場3)

時 間	行 事	会場	オンライン参加	
			当日	後日
8:30～	受付			
9:00～9:20	アトラクション②			
	石川県立小松明峰高等学校 吹奏楽部	会場1 ^(※)	○	○
9:30～11:00	記念講演 (株)ファミリーマート顧問(前副会長・元社長) 澤田貴司 氏 演題「やりたいことをやる」	会場1 ^(※)	○	○
11:15～11:55	閉会式	会場1 ^(※)	○	○

(会場1) いしかわ総合スポーツセンター/メインアリーナ

(会場2) 石川県産業展示館4号館

(会場3) いしかわ総合スポーツセンター/サブアリーナ

(※) 他会場に映像配信



開会式次第

1 開式のことば	石川大会実行委員長代行	金田 稔治
2 国歌独唱	石川県立金沢辰巳丘高等学校3年	坂 真成
3 開会の挨拶	石川大会実行委員長	栗田 真人
4 大会会長式辞	(一社)全国高等学校PTA連合会会長	山田 博章
5 来賓祝辞	文部科学副大臣	築 和生 様
	石川県知事	馳 浩 様
	金沢市長	村山 卓 様
6 来賓紹介		
7 表彰式	優良PTA文部科学大臣表彰 (一社)全国高等学校PTA連合会会長表彰	
	・個人の部	
	・団体の部	
	・役員・事務職員の部	
	・特別感謝状贈呈「団体」	
	・特別感謝状贈呈「個人」	
8 閉式のことば	石川大会副実行委員長	水元 美香

ご来賓

石川県知事	馳 浩 様
金沢市長	村山 卓 様
石川県教育長	北野 喜樹 様
金沢市教育長	野口 弘 様
石川県教育委員会事務局教育次長	塩田 憲司 様
石川県教育委員会事務局生涯学習課長	岩木 智子 様
全国高等学校校長協会石川県高等学校校長協会会長	中村 義治 様

閉会式次第

1 開式のことば	石川大会副実行委員長	杉本由香里
2 大会会長挨拶	(一社)全国高等学校PTA連合会会長	山田 博章
3 全国高P連旗返還		
4 全国高P連旗授与		
5 次期開催地挨拶	第72回宮城大会実行委員長	町田さやか
6 閉会の挨拶	石川大会実行委員長	栗田 真人
7 閉式のことば	石川大会副実行委員長	村井 繁夫



大会役員名簿

大会役員				
大会会長	山田 博章	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	会長(代表理事) 総務委員長	
大会副会長	田名部智之	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	副会長 総務委員 研修委員長	
	松下 妙子	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	副会長 総務委員 健全育成委員長	
大会運営委員	海東 剛哲	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	専務理事(業務執行理事) 総務委員 賠償責任補償制度運営委員長	
	中川 徹	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	常務理事(業務執行理事) 総務委員	
	伊福 聡	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事 総務委員 調査広報委員長	
	村井 為敦	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	大柏 良	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	館野 進一	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	内海 潤	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	中村 慎也	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	松下 由花	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	炭谷 将史	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	飛地 明國	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事	
	西岡 豊	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	理事 総務委員 進路対策委員長	
	新井田 寛	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	代表監事	
	丸山 順平	一般社団法人全国高等学校PTA連合会	監事	
全国高P連事務局				
事務局 長	中川 徹	事務局 次長	川端由美子	事務局 員
				入野登代子

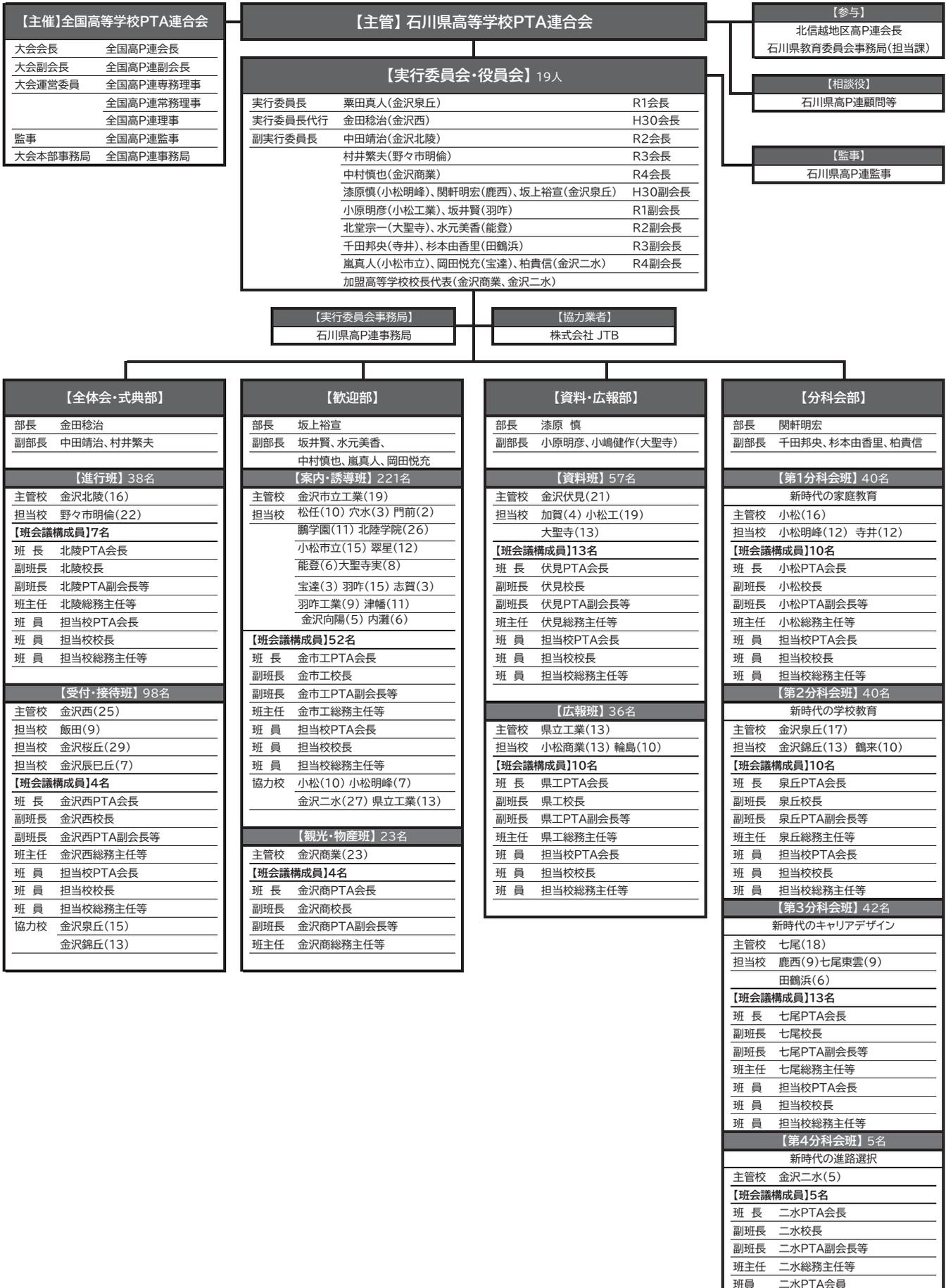


石川大会実行委員会役員会名簿

役職	氏名	備考
委員長	栗田 真人	令和元年度県高P連会長
委員長代行	金田 稔治	平成30年度県高P連会長
副委員長	中田 靖治	令和2年度県高P連会長、令和元年度県高P連副会長
副委員長	漆原 慎	平成30年度県高P連副会長
副委員長	関軒 明宏	平成30年度県高P連副会長
副委員長	坂上 裕宣	平成30年度県高P連副会長
副委員長	小原 明彦	令和元年度県高P連副会長・代理
副委員長	坂井 賢	令和元年度県高P連副会長
副委員長	北堂 宗一	令和2年度県高P連副会長・代理
副委員長	水元 美香	令和2年度県高P連副会長・代理
副委員長	村井 繁夫	令和3年度県高P連会長、令和2年度県高P連副会長
副委員長	千田 邦央	令和3年度県高P連副会長・代理
副委員長	杉本由香里	令和3年度県高P連副会長
副委員長	中村 慎也	令和4年度県高P連会長、令和3年度県高P連副会長
副委員長	嵐 真人	令和4年度県高P連副会長
副委員長	岡田 悦充	令和4年度県高P連副会長
副委員長	柏 貴信	令和4年度県高P連副会長
副委員長	山崎しのぶ	石川県立金沢商業高校校長
副委員長	三藤加代子	石川県立金沢二水高校校長



第71回 全国高等学校PTA連合会大会「石川大会」 実行委員会 組織図



第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

分科会 (8月25日(木))



白米千枚田

いしずえ
輝く未来への礎

～親から始める新時代の教育～



第1分科会

(テーマ) 新時代の家庭教育 ～今、伸ばすべき本当に必要な力～

【講演Ⅰ】 中室牧子氏

慶應義塾大学総合政策学部教授／公益財団法人東京財団政策研究所

研究主幹

【講演Ⅱ】 高濱正伸氏

花まる学習会代表／NPO法人子育て応援隊むぎぐみ理事長

(司 会) 荻野直子氏 (元石川県高P連副会長)

1. 講演Ⅰ・中室牧子氏

演題「教育に科学的根拠を」

〈講演要約〉

経済学という学問は非常に客観性を大切にする学問分野の一つでして、そうした経済学が子どもの教育の成果や学力といった、目に見えないものをどのように分析しているのかということ、ぜひ今日皆さんに知っていただきたいと思っています。今日私がお話ししたい話は、「偏差値の高い名門高校に進学すると、成績が上がり将来の学歴が高くなる」のは本当かどうか、二つ目、「偏差値の高い第一志望校に滑り込んだ方が、滑り止めの第二志望校に行くよりも成績が上がり、将来の学歴が高くなる」のは本当かどうか、三つ目、「会社で採用するなら、慶應卒よりも東大卒の方がよい」というのは本当かどうかの三つです。多分、ほとんどの方が、これらについて「そりゃあそうだろう」とお思いになったのではないかと思います。ですが、実は近年の経済学はこれを三つとも否定しています。それがなぜかということの説明をしたいと思います。

例えば、最近テレビで有名な成田悠輔さんというイェール大学の助教授がいるのですが、成田さんの論文もそうですし、メキシコ、中国、日本、イギリス、フランスなどあちこちの国で行われたほとんど全ての研究で、偏差値の高い高校や大学

に行くことが将来の進学や収入に与える因果的な効果は、ほとんどゼロであるという結果になっています。

どういうことなのかというと、その高校に行くことで能力が高まっているというより、元々能力の高い人が偏差値の高い高校や大学に行っているに過ぎないということだと思います。これを聞くと非常につらくなるご両親が多いかもしれませんが、重要なのはこの結論ではなくてこの先だと私は思っています。多くの保護者の偏差値の高い学校に行ってほしいと思う理由は何なのかというと、多分、優秀な学校に行けば周りの子どもたちの学力や能力も高く、そこからの影響を受けるのではないと思うからだと思います。これを経済学では「ピア効果」と呼んでいて、ピア効果は学力や学歴だけではなく、ありとあらゆるところに起こります。ところが学力についてだけ言えば、ちょっと面白い結果になっている研究が多いのです。どういうことかということ、優秀な同級生から良い影響を受けるのは、自分自身の能力も高い子だけだということです。さらに最近、面白い研究が発表されています。これはアメリカの空軍士官学校のデータを用いた研究で、この大学では生徒の数学の学力を高めようとして、学生を三つのクラスに分けました。一つ目のグループは、最も学力の高い学生と最も学力の低い学生を同じクラス



にする。これには、最も学力の低い子が最も学力の高い子からいろんなことをたくさん学んでほしいという意図があったわけです。二つ目のグループは、真ん中の人たちだけでつくったグループです。三つ目のグループは、学力とは無関係にランダムに寄せ集めてつくられたグループです。

当初、この研究をやっていた経済学者たちは、当然グループ1のクラスが一番成績が高くなるのではないかと考えたわけですが、学力が高くなったのはグループ2、真ん中の子だけが集められたグループだったのです。そして、グループ1の高学力と低学力の子が集められたグループでは、低学力層の学力がさらに低下するということが起きました。そして、グループ3では高学力層と低学力層の交流が生じていたのに、なぜか高学力層と低学力層だけをくっ付けたグループ1の方では高学力層と低学力層の交流は起こらなかったということが分かっています。

これは非常に重要な発見で、私たちは子どもになるべく優秀な友達と付き合ってもらいたい、そこから影響を受けて自分の子どもの学力や能力を伸ばしてほしいと考えるのですが、子どもたちは自分で自分の友人を選びます。「類は友を呼ぶ」と言いますが、結局似た人同士で集まるというのがこの論文の非常に重要な結論だったわけです。この二つの研究から我々が学ばなければいけないことが一つあって、それは、我々の予想に反して学力の低い子が学力の高い子と一緒にになると、かえって学力が下がってしまうということです。どうしてそんなことが起きるのでしょうか。

私たちの研究では、実は第一志望校の最下位になるよりも、第二志望校の1位になった方が、次のラウンドの学力や進学で有利になるということが分かっていて、経済学ではこれを「井の中の蛙効果」と呼んでいます。すなわち、周囲の人たちと比較をして、自分は学力・能力が低いのだと思い込んでしまうと、そのように振る舞い、結果として本当にそうになってしまうという状況のことです。一方、「相対的剥奪」という言い方をしたの

が社会学です。これはどういう意味かということ、他人と自分とを比較して不満や欠乏の気持ちを抱くということです。実はこの「井の中の蛙効果」と「相対的剥奪」というのは同じことを言っていて、人間というのは自分の周辺5メートル以内にいる人と自分を比較して自分の能力を測ってしまい、そのことで喜びもするし、不満を持つこともある。そういうことを表しています。

そして、この「井の中の蛙効果」というものを経済学がどんなふうにも分析の対象にしているのかということ、少しだけご説明したいと思います。今、皆さんに見ていただいている図は、学校内の順位を表しています。このように、自分が準拠する集団の学力が違うことによって、入った学年で順位が異なるということはあらゆるところで見られます。この研究の結論は国によらずほとんど同じで、全く同じ学力でも校内順位が高い子の方が、次年度以降の成績・大学進学率・将来の収入・勤勉性が高くなり、未成年での喫煙や飲酒をする確率・避妊をしない性行為や暴力行為等で補導・逮捕される確率が低くなる、ということが見られています。そして、予備校の先生たちの間では、非常にレベルの高い進学校に入ったにもかかわらず、初期のテストで下位に沈んで以降上がれない子たちがいるということはよく知られていて、これを予備校の用語で「深海魚」と呼ぶらしいです。この図表の学校では入学するとその学校の中での順位が通知表で知らされ、その途端に順位が固着し始めるのです。

我々はやはり社会的な生き物ですから、人と比べずにいることは難しいことなのかもしれませんが、子どもたちに人と比べないという価値観を持たせるようにすることはとても大切なことなのではないかと思っています。埼玉のデータでも明らかのように、全く同じ学力なのに通っている学校によって1位の子もいれば最下位の子もいる。それは必ずしも実力を正しく測っているとは言えないので、周囲の誰かと比較して自分の能力を正しく把握するということはとても難しいのだというこ



とを、大人自身も自覚し、そして子どもにもしっかりと伝えることが大切だと思います。そして、自分の実力をきちんと把握することなしに努力することをやめてしまったり、自分の人的資本に対する投資をやめてしまったりすることがないようにしっかりと支えていくことが、とても大切なのではないかと思います。

そして最後に、東大より慶應かという話ですが、ヴァンダービルト大のコンリー教授らが、アメリカの大学院で経済学部を卒業して博士号を取った後に研究者になった人たちの生産性を調べています。卒業から6年以内に経済学のトップジャーナルで論文を発表した数を見てみると、ノントップ30と呼ばれるような、トロント大とか中堅大学の上位1%の学生というのは、実はハーバード大などの上位20%の学生よりもはるかに優れた業績を残していることが分かっています。そのため、出身校のみに比重を置いた採用をすると、優秀な人をみすみす逃してしまうということになりかねないので、この点は注意が必要だろうということが経済学の研究の中で言われています。

ここから先は少しだけ政策にかかる話をさせていただきます。教育に関するデータでは、第一世代が統計やサーベイデータです。例えば国勢調査は、皆さんのところに調査員がやって来て、職業や収入、学歴など、いろいろなことを記入すると思います。こういうのが第一世代で統計調査といいます。第二世代は、今我々が研究で用いている、今日お話ししたような研究のデータというのはほとんどがこれで、行政データといいます。皆さんは役所で、様々な手続きの書類を出

します。そうしたものを匿名で加工してデータとしてためておき、それを研究利用するようになってきています。我々の国でも、行政データを使った研究は増え始めてはいますが、海外に比べるとずっと遅れています。そして、海外の中で最も進んでいる研究をリードしているのが、ハーバード大学のラジ・チェティ教授らの研究グループで、特にチェティが関心があるのは、親子間の所得の差です。子どもの方が親よりも稼ぐことができているか、この点は非常に重要で、やはり経済が健やかに発展していくためには、親世代よりも子世代の方が豊かになっているのがいいのだと思います。子世代の方が豊かになっているか、そしてそれに地域差がないかどうかを示すのがこの図です。こういう地域差があるということを見つけたチェティ教授らは、さらに面白い実験を始めます。赤い地域から白い地域に引っ越しをすることができるバウチャー券を発行します。そして、親子共に赤い地域から白い地域に引っ越しをします。すると、13歳以下で親と一緒に赤い地域から白い地域に引っ越した子は学歴が高くなり、将来の収入が高くなっています。ただ、子どもが13歳を超えて引っ越しをしてもほとんど効果がなかったということが分かっていて、これをチェティ教授らは「neighborhood effect (近隣の効果)」と呼んでいます。子育ては社会でやるものだと言いますがそれは本当で、多分、子どもたちは親の背中だけではなく、周囲の人たちの背中も見て育っている。ですから地域が良くあるということは子どもの教育にとってとても大切なことなのだと思います。そしてこのチェティ教授らが最近、アメリカにおける行政データの活用を、より一層きちんと促した方がいいという声明を出しています。教育をより良くするためにデータが教えてくれることはとても大きいので、そういったものをしっかりと活用していくべきだということだと思います。その時に一番重要なのは、データを使って様々な分析をして、そこからもたらされる様々な知見が現場に返されることが子どもたち



のメリットになるのだということ、保護者の方にご理解いただくことではないかと思っています。データが漏洩しないように、あるいは個人情報保護法をきちんと守り、データを匿名化して個人が分からないようにしながらも研究利用を進めていくということは、同時にとても大切なことだと思います。チェティ教授らが言うように、データを利活用することによって新しいことが分かってくる。その分かった新しいことを教育行政や広く学校教育の中に生かしていきながら、その歩みを着実に進めていかなければいけないと思っています。

そして最後に、今後どういったことをすべきかということについてもお話をしたいと思います。一つは、複数の問題を抱えている子どもたちを速やかに救済するためのデータ連携を、しっかりやっていく必要があるだろうと思っています。二つ目は今日お話しできなかったのですが、三つ目だけ追加的に申し上げておきますと、幼児教育無償化や大学教育無償化がいろいろ議論されていますが、私としては、そこにお金をかける前に、やはり学校の教育力を向上させるための教育投資をもっと積極的にやった方がいいと思います。質の高い教育が無償になるならば保護者も歓迎だと思いますが、質が高くなるインセンティブが教育機関にないままに無償化されても、ほとんど効果がないのではないかと懸念をしています。ですから、学校の教育力を高める投資をこれから先日本でやっていく必要があると思いますし、学校の教育力を高めるために私が最も重要だと思うものの一つは、やはり保護者の貢献と、ご協力ではないかと思っています。

2. 講演Ⅱ・高濱正伸氏

演題「思春期の親だからできること」

〈講演要約〉

実は私ははなまる学習会という塾をやっていますが、元々は三十数年前に精神科の医者の方の友達に社会的なひきこもりの問題を教えてもらい、この国はやばい。働かない大人を量産しているという

ことに気づき、そこから調べ上げたら本当にものすごい数のそういう人たちがいるというので、どこで何をやるのかなと考えたのが始まりです。僕はこの問題の核心は家庭だなど。これは家庭、両親の在り方そのものから変えなければいけないというので、両親向けの講演を中心に、あとは考える力と野外体験が一番重要なことだということをやっています。自分が大好きなことを没頭してやり切るという時間を持たせた子の方が、長期的には絶対に伸びるに決まっているのではないかという仮説の下に、私はやり続けているわけです。

入試というのは、ある種の処理能力でそういう能力も社会では必要ですが、誰も思い浮かばなかった発明ができるとか、人類初の構想ができるみたいな博士の能力みたいなものが、今、世の中では求められているというのが、今日の大きいテーマです。博士の中で一番の博士はノーベル賞をもらった人ではないですか。これが28人日本にはいるのですが、そのうちの26人が地方公立高校出身ですから。これは何だってことです。我々は入試に追い立てられていますが、本当に人類に貢献するような人というのは、地方のその地域では一番校みみたいなのんびりした学校に、地頭だけがいいみたいな、マイペースで遊び込んだ時間があるみたい人で、そういう人の方がよほど大きい発明をしているということは、一つ今の時代のヒントになると思います。

では、親として思春期に何ができるかということで、一番伝えたいのは誰に付けるかということです。思春期の時に大事なものは、仰ぎ見る、斜め上の人。先生、斜めの関係、外の誰かというのが





非常に影響力を持つ時期なのに、逆に母親が息子に過干渉のまま、ずっと中学も高校も口出しし過ぎてしまうというのがこの国の悲劇です。社会的ひきこもりの圧倒的多数は、長子、長男です。つまり上の子で、言われ役。これは僕が勝手に言っているのではないですよ。僕は現場で見て思っているのですが、ジャン＝ジャック・ルソーという人が200年前に書いています。お母さんの中には良かれと思って転ばぬ先の杖で、いろいろ手出し、口出しして、先回りして言う人がいる。これが子どもの一生の自立という目標を考えた時に最も残忍な行為だと書いているわけです。天オルソーが200年前に。最も残忍な行為をされたのが、申し訳ないけれども僕に言わせると社会的ひきこもりになった子どもがいる家のお母さんなのですよね。悪気もなく、良かれと思って、あなたのためと思って口出しが止められない。お母さん自身も孤独だから。まず外の師匠、心許して話せる人とか、しつけ面で厳しく言い切れる人にどう付けるかということが親としての第一の課題だということです。思春期は親そのものではないのです。一番影響を受けるのは外の師匠です。例えば岡田光信君という農学部の後輩がいるのですが、彼などはアストロスケールという宇宙ごみを集める仕事を世界で唯一やっています。甲陽という神戸の進学校に行ったけど、全くうだつが上がらずピリケツだったようです。テニスばかりしていたと。ここからが大事です。たまたまお母さんが「NASAに一週間行く旅みたいなのあるから行く？」と言ってきて送り出してくれたのです。つまり、外に背中を押してくれたのです。そしたら、NASAの人がめっちゃカッコいい。あの年頃ってカッコいいで動くんですね。そして毛利さんが出てきて、至近距離で「これから宇宙は君たちの時代だよ」みたいなこと言ってくれたら、スイッチが入っちゃって、もう宇宙でしようみたいに思って、帰ってきたらものすごい量の勉強を始めたらしいのです。彼は集中力がすごいのです。あつという間に全国で一番になるくらいに

なって、大学へ行ったらまた一番なものだから財務省に行って、財務省から何かすごい外資の高い給料のところに行って、一見人が羨むようなキャリアです。ところが、違う、俺はこれじゃねえみたいなの。ちゃんと自分を見ているのです。よく思い出したら、俺はあの時毛利さんの言葉で動いて、宇宙が一番忘れられないのだ。やっぱり宇宙をやろうと、40歳からやり直して、何百本も英語の論文を読み込んで組織を立ち上げて、今世界唯一の、NASAなども入っている組織の副会長になるくらい認められています。この話で言いたかったのは、あの時お母さんがNASAに背中を押してくれたという、1回の体験が人生を変えているということです。これが親にできることです。だから、親から見て、めちゃくちゃ尊敬できるな、この人。この人に会わせたいなという人に、とにかく会わせてみるというのはすごく動きます。思春期って、こちらが思う何倍も憧れてくれますから。「あの人がすごいね」などと言って、そういう形で動かしてあげるとするのが一つですよということです。

もう一つは親自身がどう生きるかということの方がむしろ問われているということです。不幸せになる人というのは、今の日本の時代にはほぼ四つかなと思っています。一つは、人目を気にする習慣です。不幸の方程式は人目、比較、コンプレックスです。コンプレックスで自分を狭めている。それから、小さい頃に「こうしなさい」「○○しなさい」と「なさい」を言われ続け、やらされ感で生きている人。このやらされ、人目、比較、コンプレックスにはまらないでほしい。これが大事なことなのですが、大人こそ、大半の人は結構危なくて、皆さん子育てに夢中だった時代が今まで続いたから、この十数年はよかったのでしょう。ところが、人生はあと50年あります。その時に女性としてどう生きていくか。例えば幼児を今、ここに放すとどうなるかということ、もう全部遊びです。元々人間というのは全てが関心事なのです。ところが小学校に入ったあたりから、「それは価



値がないことだよ」「そんなことやってどうするの」みたいな外側の価値観を押し付けられる。そのあたりから、成績がいいとか満点だとうれしがる母親を見せつけられていくと、外の人の気持ちに向けていろいろ合わせていく。そういう優秀児こそ危ないですよ、本当の自分を見ていないから。ここが重要なことで、「私はこの時に一番心震えるわ」というものを押さえた上で、それをできれば仕事にできると幸せですが、親こそ本当に自分がやりたい人生を実現することに集中して、ちゃんと道を歩いているかということ、思春期の子は見ています。親として直接何ができるか。一番言いたいのは大人こそ個人として良く生きているかです。そんなご立派でなくていいのです。本当に自分を見て生きているのかというだけです。

それから、もめごとや葛藤は肥やしです。除菌主義は非行への道です。「親がけんかに乗り込み、子は友を失う」にならないようにしてください。トラブル経験や挫折経験で追い込まれた時にこそ、いろんな意味で心が強くなるチャンスです。もちろんものすごくひどい人がいる場合は転校して逃げるとか、現実にはたくさんカードがあるのですが、基本的な態度として、子どもはよしよしぬくぬくだけでは育たない。いろいろと嫌なことがある、つらいことがある、孤独にもなる、だから強くなるのだという、まさに真ただ中の思春期にいるのだということです。

それから、学習のことだけで言うと、「分からないまま」にしないという1点です。やはり苦手とか嫌いという、自分で自分を縛り上げる罫にはまっている子が多いです。その心の自分を縛り付けているマジック、魔法を解いてあげることが塾の先生の仕事だったりします。絶対にできるのだよということです。時間なんかかかってもいいのです。コンプレックスというのは思い込みですから、自分をだまさないということです。

最後に一つ、障害がある子のお母さんもいるかもしれないのでお話しすると、発達障害などは、ふさわしい枠組みに行けばもうがんがん伸びるな

と思っています。息子は重度の障害があります。僕はこの子が生まれてから10年間、さっき言った3浪4留ですからね、もう本当にどうしようもないどら息子だったのです。ところが、この子が生まれてからひたすら頑張る自分というのをある時発見して、ああ、そうか、この子は存在することで周りを真摯にして、一生懸命にする力があるんだなということに気付いたのです。家族ってそうでしょう。お母さんやお父さんが偉いとか、2番目、3番目じゃないでしょう。家族で一つではないですか。家族で一つという価値をつくっていく仲間だよということをやっていくと、そういう障害の子にもポジションはあるし、むしろ本当に価値があると切り切れるので、そういうものも高校生たちには気付いてほしいなということで終わりにしたいと思います。

3. 質疑応答

司会 それでは、これから質疑応答の時間にまいります。今日はお互いにお話を聞かれてどのように思われたかを、短くご紹介いただけますでしょうか。まず、中室様からお願いいたします。

中室氏 今日、書道の例などが出てきましたが、これは親としては望ましいというか応援してあげたい関心事ですが、一日中ゲームをやっていますとなったときに、それを応援してあげればいいのかどうか、親としては逡巡することっておありになるのではないかと思うので、子どもが好きなこととか好奇心の見極めをどうしたらいいか、ぜひお聞きしてみたいと思いました。

高濱氏 いいですね。一番ホットな質問で。やはりYouTubeやゲーム漬け、特にコロナの時にそうだった。これは簡単に言えば、僕はゲームは子どもはするべきではないと言い続けていた人間です。ゲームに懸けてeスポーツで勝負するという道を選択するのも、なしではないです。でも、ハイリスク・ハイリターンです。そこで本当に食えるなんて、時間も短いし、そんな甘くないです。やはり大半の人は人の気持ちが分



からなくてはいけない仕事に就くし、大半の人は夫婦として人の気持ちが分からなければいけないのだから、アナログの人間関係が育つようなことに集中することの方を推薦します。それは外遊びだったりスポーツだったりということです。

司会 高濱先生に向けてのご質問ですが、先生のお話の中に、好きなことに没頭するのが大切という話があります。「好きこそものの上手なれ」という言葉と同じ意味かと思いました。生徒の側の興味・関心に基づくモチベーションと既存の教育システムを上手に組み合わせることに、理想に近い解があるような気がします。既存のシステムのどの部分をどのように変えてみるのがよいのでしょうか。ご意見をお聞きしたいですということですが。

高濱氏 既存のシステムという言葉で表せるものがいっぱいあり過ぎて簡単ではないのですが、基礎の力、学力というのがあって、例えば字が書ける、本が読める、正しく発表できるみたいな、特に言葉の力なのですが、計算などはもう、ホリエモンなどはなくてもいいんじゃないかと言っていますが、僕は数理的思考力を伸ばす意味であった方がいいと思います。その中で僕が30年いろいろやってきて思うのは、漢字だけはちゃんとやっておいた方がいいということは言い切れるなど。結局、漢字ができないから文章題も読めないし、理科もできないしになっちゃう。また、基礎の上のどこを伸ばすというのは、時代も変わるので、お父さん、お母さんの未来を見る目と賭けみたいなのところがありまよね。20年前にプログラミングに思いっきりシフトして高専に行ったという子がいたのですが、今大成功しています。今の時代に当たったというか、稼げる方に行けたという。それはたまたまということなのでしょうが、そういう形で次の時代を見抜いて上の部分をどう伸ばすかというのに賭けていくというのは、すごくありだと思いますね。



司会 賭けをするとすると、親としては不安もあります。やはり根っこの大事なハートの部分は、きちんと伝えていかなければいけないということかなというふうにも感じました。

高濱氏 そうです。僕がとにかく後伸びする子の家を一言で言えと言われたら、やはり言葉がしっかりしている家です。言葉の実力って各家庭でも全然違うのです。よく「お父さんが東大、お母さんが慶應みたいな家はできるよね」と言いますが、そうではなく、お父さん、お母さんも言葉を大切にしているから、学歴もあるし、仕事もできる、その言葉の文化が子どもに、いわゆる薫陶みたいな形でいぶされて移って、やはり言葉を大切にすることから、定義とか定理とかを習ってもしっかりその意味を把握しようという姿勢で世界を捉えているのだと。その言葉の捉え方みたいなのは、どの時代でも絶対に重要なことだと思います。

司会 引き続き、中室先生へのご質問をご紹介します。中室先生の著書から、野外活動、合唱コンクールなどでの非認知能力を高める経験が大事だと学びました。高校生からでも非認知能力を高める家庭教育、学校教育は可能でしょうかということですが。

中室氏 近年の経済学では、学力テストとか偏差値で測ることができる認知能力というものと、人格的な特徴とかやり抜く力とか自尊心とか忍耐力とか、テストで測ることができない能力のことを非認知能力と呼んでいて、この両方が学歴や将来の賃金などに影響することを示す研究がたくさん出てきています。非認知能力は成人



後も可鍛性があるということを示している研究がありますので、高校生だとまだ鍛えて伸びると思います。例えば日本人を対象にした研究で、部活動や生徒会活動をやると重要な非認知能力であるリーダーシップが鍛えられ、その非認知能力によって将来の賃金が伸びるということを言っている研究があります。なので、積極的にボランティア活動や生徒会活動、部活動をして非認知能力を鍛えるということは、子どもの将来にとって非常に良い影響があるのではないかと思います。

司会 さて、今日はサブテーマとしてこちらに掲げてあります「新時代の家庭教育～今、伸ばすべき本当に必要な力～」ということでお話を伺ってまいりました。いろいろな例を出されて、提言もありましたが、質問の中には、「そして何をすればいいのですか」というものがありましたので、ぜひ答えていただければと思います。それでは高濱様からお願いいたします。

高濱氏 親としては今日言ったように、親自身がいい生き方を見せるということが大事だと思います。それから子どもに何をやらせるかという意味では、部活ですごく伸びるし、ボランティアとか、バイトも結構伸びます。バイトって真剣勝負になるので。あと恋愛です。恋愛こそ、もう切実に他者を思うから、人を思う気持ちがめっちゃくっちゃ鍛えられます。他者経験という意味で恋愛ほど磨かれるものもないと思います。思春期というと心配だと思いますが、決してネガティブではないと言いたいです。

司会 保護者としては心配が先立ってしまう。でも、高校生活たった3年間の中に、私たち大人が振り返ってみても様々なドラマがありましたよね。それをぜひ、子どもたちにも感じて、それぞれの成長をしてほしいと思います。中室先生はこのサブテーマについて、一言でお答えいただくとしたらどんなことになるでしょうか。

中室氏 一つだけというのは非常に難しいのですが、やはり地域の力を高めて教育力を高めて

いくことがとても大事なことだと思っています。どなたにとってもご自身のお子さんが一番大切だと思います。でも、お隣のお子さんの状況が悪いと、その状況は経済学で言うところのピア効果によってご自身のお子さんに確実に影響すると思います。ですから困難な状況に陥っているご家族やお子さんがある場合、自分の子どものためにも、背を向けないで地域でしっかり助けにいきましょうということは、私はその地域の教育力を高める上でとても大切だと思います。またこれも経済学者として言うと、実は公立学校の質と土地の価格というのは非常に強い因果関係があると言われています。地価が高いところに良い公立学校ができるのか、良い公立学校ができたからその地価が上がるのかというと、後者の方が蓋然性が高いということが最近分かっています。地元の公立学校の質が高いということは、地域全体の経済力を高めるという意味でもとても大切なので、教育の地域力を高めるということがとても大切だと思います。

司会 ありがとうございます。それぞれ専門分野は違いますが、お二人のお話を伺っているとやはり共通するところもありますね。今こうして石川の地で集われた皆さまも、それぞれの地域を大事にして、今日学ばれたことを参考にして、いい地域をつくっていただけたらと思っています。皆様、本日は様々な面でご協力いただき、誠にありがとうございました。とても素晴らしい時間を、この石川・金沢の地で共有することができたことをとても嬉しく思っております。実際にこうして対面でお話をする機会、そして様々な地方からたくさんの方に来ていただいたことによって、この空気感を感じることができました。また、それぞれ学ばれたことを各学校に持ち帰り、多くの人々にシェアしていただきたいと思っています。



第2分科会

(テーマ) 新時代の学校教育 ～学習意欲を高める個別最適化、協働的な学び～

【基調講演Ⅰ】 浅野大介氏 経済産業省 経済産業政策局 産業資金課長

【基調講演Ⅱ】 合田哲雄氏 内閣府 (科学技術・イノベーション推進事務局) 審議官

【パネルディスカッション】

(パネリスト)

浅野大介氏・合田哲雄氏

高木慎一郎氏 (石川県立金沢泉丘高等学校PTA 前会長)

(コーディネーター)

外村仁氏 (元エバーノートジャパン会長)

(司 会) 吉河ゆかり氏 (石川県立金沢泉丘高等学校PTA 副会長)

【基調講演Ⅰ】 浅野大介氏

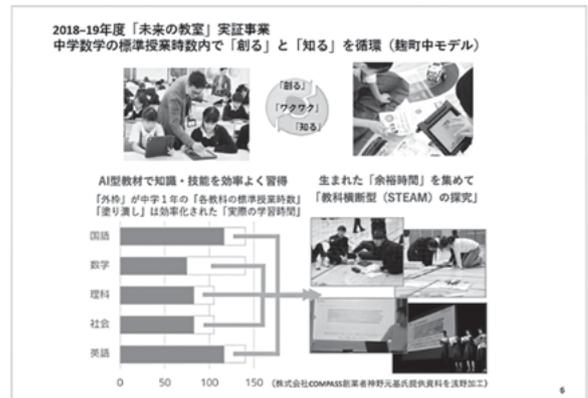
演題：「未来の教室」を構想する

2017年に文科省が告示した新学習指導要領を実現するために、これまで約5年間、経済産業省の教育産業室長等の立場から、役所の垣根を超えて仕事をしてきた。もともと教育産業室は、民間の教育サービスの所管・振興をする立場であり、学校と民間のセクターがそれぞれ手を取り合ったらよいと思った。2018年に、生徒も先生も1人1台端末を持つことによる、学びの変化を目指す実証事業を経産省から計画した。



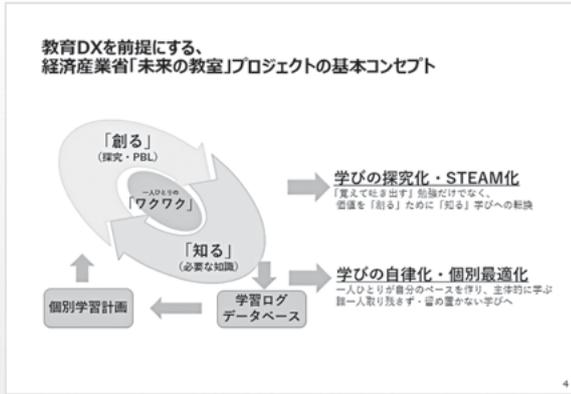
教育のDX 大人の働き方と子どもの学び方 経産省「未来の教室プロジェクト」

教育のDXにアプローチしたのは、理想を掲げていても道具が揃っていないと難しいから。インフラとしてネットにつながり、自分でタイピングできることから主体的・対話的で深い学びができるのではと考えた。DXについては、縦横二つの



軸の掛け算で整理している。横軸が対面かオンラインか、縦軸がオンデマンドかリアルタイムかで、それを2×2のマトリクスのように組み合わせる。今の学校はリアルタイム×対面が大半だが、コロナ禍の2年間で大人の働き方は4つの象限を自在に組み合わせるようになってきている。だとしたら、それに合わせた学習環境を子どものときからやっておくことで、大人の働き方と子どもの学び方を同期していくきっかけになると思う。子どもに身に付けてほしい資質や能力に合わせて、時間や教材などの手段を、デジタルテクノロジーを使って自在に組み合わせる。

そんなことを前提に、経産省の「未来の教室プロジェクト」は始まった。文科省の主体的・対話的で深い学びを「創る」と「知る」ことの循環だと言い換えた。また、「自立化・個別最適化」ということと「探究化・STEAM化」という二つの軸で学びを変え、自分のペースで自分の学びを



組み立てていく感覚を一人でも多くの子どもたちに身に付けてもらう。

事例1 一人一人にとっての1時間の価値

例えば、千代田区の麴町中学校での数学の時間の実証研究では、一斉講義を全くせず、1人1台の端末を使って生徒一人一人が1年間の単元を意識しながら自分のペースで問題を解いた。また、長野県の坂城高校でも、「すらら」というデジタルドリルを使って、一人一人の学習計画に基づいた学習環境を作った。分からないものを念仏のように聞いて、分からないことが上塗りされていく虚しい1時間ではなくて、分からなかったことが分かるようになった、そんな貴重な1時間にできるのならば、デジタルテクノロジーをどんどん使ったらいい。それぞれ進度の違うことを正面から認めて、一斉授業ではなくてそれぞれがやるべきことを1時間の中でやることを狙った。

事例2 教科横断とSTEAM化

加えて、坂城高校の生徒にとっては、大学受験ではなく、就職や専門学校という自分の将来を考えた勉強のモチベーションが求められていると痛感した。しかし、各教科という縦の系列と世の中の仕事との関係性が整備されないまま、教科の学習が縦のサイロに割れた形で展開されてしまっているのが現実だ。デジタルテクノロジーの力を使えば、各教科が求めている資質・能力と現実の仕事とをコードで結び付けることが可能だから、教科や社会的な探究を紐づけて子どもたちの学習モチベーションを作ることや、先生同士の教科横断の協力もできる。それがまさに学びの探究化とSTEAM化につながるのだろうと思う。学校の教科を総力戦で使うことをイメージする努力が重要だ。主要5教科を道具として使い、体育や技術・

家庭、公共や特別活動という学校ならではの科目の中での探究を充実させていく。

事例3 教科横断と探究

スポーツ一つとっても一つ一つのプレーの背後には科学と理論があり、体育や部活の時間は学びの機会になる。小学生向けにラグビーの実証事業を行い、算数と体育の時間のつながりをもたせてプログラムした。学校の先生だけでなく、プログラムを作った民間の教育企業、コーチングに入ってくれる外部の人たちがオンラインも対面も両方とも入ることで、学校にも気づかされる場面もたらされた。また、岩手県の専修大学北上高校では、Z会と一緒に「探究」の時間を学校の中で増やすカリキュラム改革を進めている。各教科の時間配分を組み直す上で、教科横断型授業を考えている。社会的な事象を数学の統計で処理したりなどの授業アイデアについて、先生方が縦のサイロの教科単位を超えて集まり、プログラムを組んでいる。

事例4 オンライン・テクノロジーの可能性

初めは専門科の高校6校で、リアルな課題と普通教育の掛け算を行った。最初の数年間はコロナ禍なので、オンラインで行った。例えば農業高校の実習で、作業をもっと簡単にするためのロボティクスやデータサイエンスの勉強をする。また、旭川農業の生徒のプロジェクトをネットでつながって見ていた奈良の王寺工業高校の生徒と組み合わせることもできる。全然テーマは違っても、お互いの得意を出し合ってオンライン上で協力しようというフェーズに発展する。これがGIGAスクール時代の高校の学びである。

さらに、オンラインだけでなく、研究旅行などで行き来することにもつながる。大学生・大学院

教育DXとは、この4つの学び方を「組み合わせ自在」にすることではないだろうか

	対面	オンライン (含、新しい対面)
オンデマンド (必要な時に)	必要を感じて、職員室に質問に行く 	分かるまで、繰り返し、講義動画やドリルで知識を習得
リアルタイム (ライブ)	場集まって、議論する人の話を聞く 	ZOOMで国境・地域・学校を超えて議論する



生の関係性をオンラインでつくることも可能である。他にも、「未来の教室」事業の一環である「未来の地球学校プロジェクト」では、東京の玉川学園のハンドベル部が、自分たちの音色をろう学校の生徒たちに届けるため、信号を振動に変換させて手で感じてもらうようにした。テクノロジーでの解決方法の面白い一例だと思う。

そして「エシカル・ハッカー（正義のハッカー）」というプロジェクトを高校生向けに始めた。趣味のゲームから、サイバーの世界で将来を開けるという希望をもって、勉強を始める子たちが出て来た。そう考えると、学び、シゴト、福祉のピラミッドが成立した状態をつくるのが、重要だと感じる。福祉というのはそれぞれに個別最適な状態。そして「シゴト」という夢中ではまれることを磨くために学びがある。そのピラミッドを学校や日常生活の中で作る手段の一つとして、教育のデジタルトランスフォーメーションはある。

探究的な学習環境

「探究」には、心理的安全性、物事の抽象化、論理の積み重ね、一人一人の当事者性が必要だが、今の学校全体の環境はそれを提供できているのかは疑問だ。ただ、学校に限らず、会社や役所など日本のあらゆる組織が抱えている病根であるとも思う。その中でも、学校にはゲームチェンジャーとしてのこれまでの歴史を受けた役割を期待したい。その学校を社会全体が支えていくという大きな転換点に今はある。さまざまな仕事、職能を持っていて、教育に対する問題意識を持っている一人一人が、オンラインでも face to face でも、いろいろな形で教育に関与し、真に探究的な学校をつくっていくことが日本のこれからを左右する一つの大きいチャレンジになるのではないかと思う。

【基調講演Ⅱ】合田哲雄氏

演題：教育 DX 時代の子どもの学び ～学校は何のためにあるのか～

全国高等学校 PTA 連合会の皆さま方、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました内閣府の合田でございます。今日、私は、私自身が元々文部科学省におりまして、2017年、それからその前の2008年の学習指導要領の改定などを担当してきたということもあってお呼びいただいたと思いますが、私自身も目黒区立の小学校と中学校のPTA会長を合計6年やらせていただきまして、残念ながら高等学校の会長をやらせていただく機会はなかったのですが、それにおいて高校の会長をなさっておられる皆さま方には心からの敬意を抱いているところでございます。

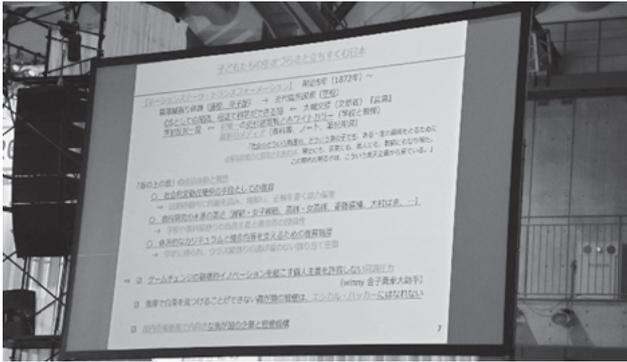
教育DXというのは、教育の学びを変えていく、子どもたちの特性や関心に応じた学びにしていく、ある意味ではラストチャンスだと思っておりますし、そのことが本当に深刻に求められているということも共有させていただき、ぜひそういう方向で大人として子どもたちに対する責任を果たしていければと思っております。

教育のデジタル化、GIGAスクール構想、1人1台の情報端末というのは、もちろんそれによって学びが非常に効率化すると分かりやすくなるということもあるのですが、一人一人の子どもたちの認知の特性や関心に合わせた学びが可能



ところで、今の日本の学校で「探究」は可能なのか？

- ・そこに「心理的安全性」はあるか
(常識や通説を覆す努力を、面白がってくれるか)
- ・そこで「事柄を抽象化する力」を育めるか
(リサーチクエスチョンを立てるのを、助けてくれるか)
- ・そこで「論理をつくる力」は育めるか
(証拠を並べて論を立てるのを、助けてくれるか)
- ・そもそも「当事者意識」は育まれるか

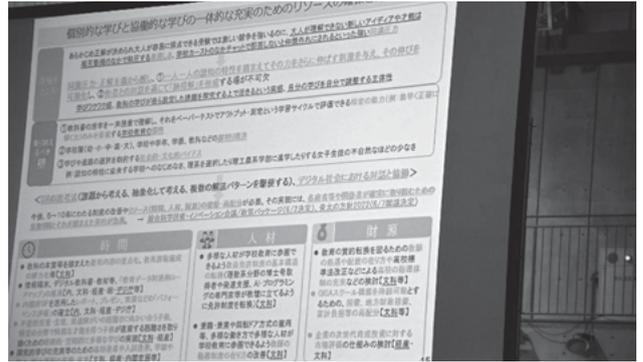


になるということが、最大のメリットであり、重要なことだというふうに私は思っております。であるがゆえに、子どもはこのGIGAスクール構想というものが極めて大事だということで進めているわけでありませぬ。

この5年間で、さまざまな制度を思い切って変えていきたいというふうに思っております。学校というものを成り立たせている三つのリソースは、これは経営でも同じだと思うのですが、時間と人材と財源です。その時間の使い方も、教育課程も大きく弾力化したり重点化したりしていきたく思っておりますし、デジタル化も前に進めていきたく思っているのですが、何で山川の歴史教科書の脚注を幾つ覚えたかで合否の決まる入試が変わらないのか。これは会長の皆さま方のときもそうでした。もっと前もそうでした。その理由は明確で、それが大学の先生方が採点が楽だからです。しかも、責任を負わなくていいわけです。

探究的な学びが大事だったら、その探究的な学びの結果であるレポートやプレゼン、あるいはディベートや対話、討論、実演といったものをちゃんと評価するようにならなければなりません。なぜ進まないか。それは山川の歴史教科書の脚注は評価される側の責任を問われないのですけれども、こういった、教育学の世界ではパフォーマンス評価と言っていますけれども、パフォーマンス評価は、評価する側の見識が問われるからであります。ただ、他方で、今はAIとか数理科学によって、書いた文章がどれぐらい論理性があるかぐらいのことはチェックできる仕組みになっていますので、子ども内閣府としては、大型研究費を使ってそういったものをサポートするような仕組みもつくっていきたく思っております。

このように改革を進めていきたいというふうに



思っております、もちろん予算もしっかり取ってきたいと思っておりますし、教育制度の根本、例えば免許制度も大きく変えていって、今の免許制度は志のある人が教壇に立つ障壁になっていますから、教育学部に行っていなくてもエッジのある方には教壇に立っていただけるような仕組みにぜひしていきたいということを、今、文科省でも真剣に議論しております。

私は知らなかったのですが、ヒンドゥー語では「私はヒンドゥー語を話すことができる」ということを意味する表現は「私にヒンドゥー語がやってきてとどまっている」というふうに表現するのだそうです。私は本当に素晴らしい表現だなというふうに個人的には思っています、何が言いたいかと申しますと、言葉を使って思考することは、過去の長い文化の対話の上に成立することだと思えます。いかに独創的な知識や思考であっても、過去の知的蓄積からのギフトであるという謙虚な気持ちを持つということは、極めて教育的ではないかなというふうに思っております。

かつてと違ってますます Society5.0 とか DX だというふうな社会になっていくと、データや情報、アイデアといったような目に見えないものに、どんどんどんどん大きな価値が生まれてくるわけです。そうすると社会構造自体が、そういうことを独創的に考えた人が、winner takes all で全部総取りをしてしまうということに、今なっているわけです。アメリカは現に、そのことによってジニ係数が拡大しているわけですが、われわれは子どもたちに何を託すのか。「これからこんな社会になる」とは、われわれも絶対に言えないわけです。なぜならば、これだけ変化の激しい時代の中で、これからの時代をどういうふうにつくっていくかは、目の前の子どもたちがわれわれを乗り越えて、われわれが想像もできないようなアイ



デアや知識を生み出すことによってしか社会は発展しないからであります。ただ、何でわれわれ大人が公費を投じてでも教育を行っているかという、creativity（創造性）はもちろんものすごく大事だと思うが、同時に fairness（公正な社会）だとか dignity（個人の尊厳）といったものを両立させる社会をつくってほしいということで、われわれは子どもたちと学びを共有しているのだろうというふうに思います。

その意味においては、いかに独創的なアイデアであっても過去の膨大な蓄積との対話であると、そのことを謙虚に受け止めて、教育は俺が点数を取ったから誰かが点数が減るのだというゼロサムではなくて、社会全体が良くなるというプラスサムのために公財政投資がなされているわけでありますから、そういった教育に転換していくということの大きなうねりが今生じている、そのために私も、犬猿の仲と思われているかもしれませんが、経産省とも二人三脚で教育改革を進めているということを現状申し上げて、私のご説明とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【パネルディスカッション】

(外村) 教育DXの学び方について

（二者択一で、先生の授業は対面（リアル）授業が良いか、録画（オンデマンド）した授業が良いか）

(合田) 目指しているのは、ハイブリッドです。

一人一人に対応した授業というものを、日本の教育界は蓄積が大きいので、その蓄積を無視することはもったいないが、他方で全ての子どもが同じペースで学ぶわけではないので、一人一人の子どものペースに合わせた、つまり個別最適な学びというのは、一つは自由進度学習（自分の習熟度に応じて学べる）もう一つは自分の

特性や関心に応じた学びができる、この二つだと思います。

(浅野) 二者択一ではなく、その場における組み合わせがいかにか自在かということというのが、すごく大きな話かなとは思いますが。

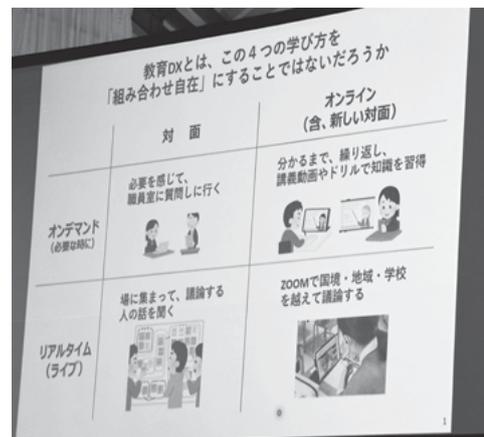
(外村) 総務省の「Inno（異能）vation」プロジェクトで「うちの子は変だから駄目なんだよね」と言っていたお父さんがころっと変わって「うちの子は変だから見所がある、それを伸ばしたい」と言い始めるように、子どもたちを生きづらくしているのは何なのか。それをどうしたら社会環境として、あるいは学校環境として変えていけるか。

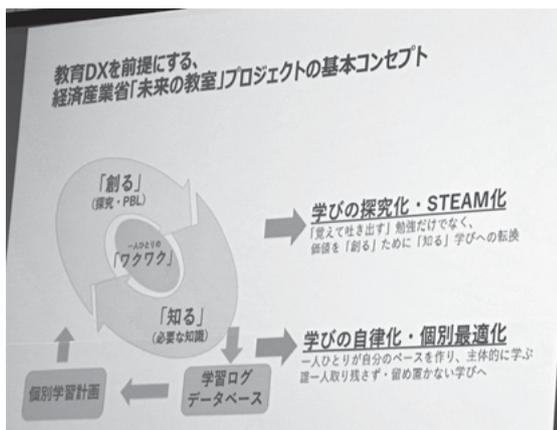
(高木) 何か得意なものを伸ばす方が、本人が楽しく過ごしている、そんな顔を見るのは親としてはいいなと思います。

(合田) 社会がどんなにダイナミックに変わっているのかということ子どもたちとも先生とも共有していただきたい。好きを諦めて総得点を上げるというのではなくて、好きを突き詰めるというふうに変わりつつあります。

(外村) STEAM教育などを通じて才能ある子を伸ばしていくことを、今までの発想を換えて変な子、変わった子を褒める、伸ばすというふうに親として、教室として変わっていくためには、何かありますか。

(浅野) 自分の人生観を変えるような出会いというものがあったからこそ今がある。今の常識とかというものだけではない角度というもので、今のメインストリームでうまくいっちゃっているぞとか、今苦しくてしょうがないぞとか、多分どっちもリスクで、だったら違う風に当ててあげようよという機会をどれだけつくってあげ





られるかなのだろう。

あとは別に変わっていると、才能がある・ないとかというよりも、別に一人一人何らかの特性を花開いて人生楽しく過ごして終わるといことがやはり重要なわけです。

(外村) 親がチャレンジさせてあげたいと思っても、何となく無意識的にちょっと安全にいつてしまうというのはどういう理由があって、これをこれから変えていくためには教育側からどう思いますか。

(合田) 親というのは子どものリスクを最小化したいと思うものなのだと思います。

自分はまんべんなく点数を取ることが向いているのだという人に、無理やりそれをやめろという必要は全くないのです。けれども、それだけが正しいと言われると違いますよということを、やはり共有していく必要があると思います。

(外村) リスクというのはある・なしで判断するものではなくて、やはり先のことを考えて、どちらの方がより将来性があるかというのがリスクの判断です。向き・不向きもあるのだけれども、どちらを取ってもリスクがあるから、しっかり考えて選ぶ。

自動的に昔からそうだからと信用してしまうのか、それをちょっと考え直すかによって、発想が変わってくると思う。

(浅野) 何か変わった校則、不思議な校則に、そのルールは誰かがつくってくれた経緯とか理由が必ずあるわけです。それでその経緯とか理由を振り返りながら、より良い環境をつくっていく。

これは先生任せにするのではなくて、こういう学校が欲しい、こういうふうに職員室を変え



たいというのは皆さんがやるべきことです。

(外村) (以前は) いい答えを出す子がいい子で出世していたのですが、今は答えはないので、問題解決力、未知のこれまでなかった問題に対してどういうふうな解決ができるかということを考えられる子を育てなければいけない。自分から問題を探しに行く力というのが大事かなと思うのです。

子どもが無理なくプレッシャーを感じずに考えるには、親として教室としてどうしたらいいか。

(高木) バランス良くストレスを感じることも何か学ぶきっかけになるし答えが一つということではない。

(合田) 子どもは親の所有物でもなければミニチュアでもありません。全然別人格で、全く別のことを考えています。子どもが自分たちを乗り越えていく、出藍の誉れに拍手をちゃんと送る。親や教師が全ての真理を握っていて、与えるということではもうなくなっているということ、認めることが大事。

(浅野) この道しかないという発想を捨てるということが一番いいと思う。一人一人の幸せは違うし、そこを親がどう言ってあげられるかというのは大きい課題。だから親の学校に対しての視線というのもそうで、先生はこうあるべきだという、このべき論の圧力というのは、先生たちを不自由にし、発想をも不自由にする。それはめぐりめぐってお子さんの自由も、もしかしたら間接的に奪ってしまうかもしれない。

(外村) 日本はべき論が多過ぎると思うと同時に、子どもの力を信用してあげてもいいのでは。子どもも立派な大人で社会に役に立つという実感を持たせるように過ごすということ、家でやっていただくといいかなと言いまして、終わりとなります。



第3分科会

(テーマ)

新時代のキャリアデザイン

～ローカルキャリアが育む未来の働き方・生き方～

【基調講演】

石井重成氏

青森大学准教授、地域人材共創機構代表理事、総務省地域情報化アドバイザー

【話題提供Ⅰ】

古屋星斗氏

リクルートワークス研究所主任研究員

一般社団法人スクール・トゥ・ワーク代表理事

【話題提供Ⅱ】

岩本悠氏

一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム 代表理事

【パネルディスカッション】

(パネリスト)

石井重成氏・古屋星斗氏・岩本悠氏

山岸充氏 (石川県立七尾高等学校PTA会長)

(コーディネーター)

森山奈美氏 (株式会社御祓川 代表取締役)

(司 会)

輪瀬薫氏 (石川県立七尾高等学校PTA副会長)

基調講演・石井重成氏

演題「ローカルキャリア研究から見えてきた未来のキャリアデザイン」



〈講演要約〉

現在、青森県を拠点として、地域創生や震災復興、人材育成を研究している。きっかけは2011年3月11日に起こった東日本大震災である。震災から一年後に、被災地を訪れる機会があった。震災復興が進んでいないこと、そして、被災地に

る住民がエネルギーであることに驚いた。当時働いていた会社を退職し、釜石市役所職員として働くこととなった。震災復興の仕事に携わる中で、外から来た人、地域に移住されてきた人、支援に関わる人が釜石という地域に関わることにより、新しい事業やコトが生まれてくる光景を目の当たりにした。この体験がローカルキャリアを探求していく原点である。これらの経験を通じ、都市部のビジネスパーソンこそ、地域で揉まれる体験をしたら良いと考える。また、長い人生の中で、何年間でもいいので、地域と関わる機会を持つことは、個々人にとっても、地域にとっても良い機会になると考える。

ローカルキャリアの定義は「地域と関わりながら働くこと、すなわち、地域という生活者に近いところで、生活者と共生関係を持ちながら、地域の人や資源を生かし共創すること。」である。

これまで全国5地域において「CAREER FOR」



というローカルキャリアの探求コミュニティをつくり3本の白書の制作に取り組んだ。約700名を対象として意識調査を行い、そこから得られた示唆を紹介する。東京都と、岩手県の釜石、石川県の七尾、長野県の塩尻、岐阜県、鳥根の雲南市の5地域で、働く世代のビジネスパーソンに、東京都で働く人と同じ内容の質問をしたところ、「働きやすさ」あるいは「働きがい」については、主観的な気持ちは大差ないことが判明した。また、地域においてローカルキャリアと言えるような仕事をしている人にとっては、「自分」という存在が相対的に都市部で働いている人よりも大きい傾向も見られた。これは「自分の仕事は周りに影響を与えているか。」という質問についての回答であり、東京の人は少ないことが示されている。大きなコミュニティ、大きな組織で働いている人にとって、「自分のやっていることが何の役に立つのか分からない。」ということである。それと対比して、小さな世界だからこそ、小さな団体や事業規模だからこそ見えてくるものがある。

日本人材機構の元代表である小城武彦氏によると、「都市部でのキャリア（アーバンキャリア）」は分業的であり、匿名的であり、距離感があり、短期的であり、コンペティティブ（競争）であり、仕事と生活を異なるものとして、それでもバランスを取っていくとされている。一方、「ローカルキャリア」は、統合的であり、顔が見える関係性でもあり、手触り感があり、少し長期的でもあり、共創を大事にしていく、地域とのつながりや関係性を大事にしていく、あるいは仕事と生活が融和していく、という対比ができる。

私が2018年に行った研究において、「自分の幸せは何に起因しているのか」ということを調査したところ「自分で決めたかどうかが一番大事である。」という結果が出ている。その次が「年収」である。「学歴がいいかどうか。」と働いている人の主観的な幸福というのは統計的に有意な相関は無い。

これと似たような研究がアメリカでもされている。例えば、イェール大学のエイミー氏によると、「仕事」について三つの意味があるとされるJob、Career、Callingの三つである。この中の「Calling」

ある種意義だったり、使命感ともいえるような、これは自分の役割だと思えることを仕事にしているのかどうか。このCallingという気持ちを持っているかどうかというのが、年収600万円以降のビジネスパーソンの幸福感を決めていくということも研究されている。

地域での暮らし方、地域での働き方というのは、本当にこの10年で多様化してきている。

2011年3月11日の東日本大震災は国の形に影響を与え、パラダイムをつくってきた。いわゆるプロフェッショナルといわれるような人たちが被災地にたくさん環流していった。大企業と基礎自治体がダイレクトに連携していくひな形ができた。また、「地方創生」政策によって田園回帰、都市部から地方へ人の流れをつくり人口減少問題を克服する取り組みもなされている。

「人生100年時代」へのLIFE SHIFTの変化により、「教育」、「就職」そして「引退」という人生の3ステージモデルは終わり、企業のライフサイクルが短くなっていくことに対し、人生は長くなっていく。一つの会社に勤め続けるモデルは構造的に成り立たなくなり、起業、副業、地域に自分の身を置くことなどの試行錯誤や探求こそがこれからの人生におけるキャリアである。

「都落ち」という言葉がある。その意味は「都にいられなくなって地方に逃げ出すこと」とされているが、「既存の概念に縛られて都から出られないこと」とも言える。「都落ち」の定義を変えていきたい。

ローカルキャリアに関連し、注目されている四つのキーワードを挙げる。一つ名は「越境学習」である。特に都市部の企業の人事の中で、新しい事業を創造できない、腹の据わった将来の幹部候補生が育たない、そういうときに武者修行させる機会とする。二つ目は「コロナ」である。働く場所と暮らす場所が遊離していく、独立の事象として選択できる時代が近づいてきている。三つ目は「地域探究学習」である。これは高校で必須化され、多くの地域で試行錯誤がなされている。現在探究学習で多くの地域で取り組まれていることは、10年後、20年後の次世代の地域への価値観、ふるさとに対する考え方というのを変えていく可能



性を秘めている。四つめは「サステナビリティ志向」である。特にZ世代と呼ばれる若い世代の中でとても注目されている。「循環型経済」をとっても、「Well-being」をとっても、「SDGs」をとっても、地域との親和性が高い。地域と都市の垣根がより無くなって、一人一人が「自分のことを自分で決める」オーナーシップが育まれていく中で、自分らしい暮らしや仕事ができる世界をどうやったらつくっていくことができるのか。そんな議論を皆さんと今後も深めていきたい。

話題提供Ⅰ・古屋星斗氏

演題「コミットメントシフト」



〈講演要約〉

私は、若者のキャリア形成、若年労働市場に関することを専門にして研究している。高校、特に定時制高校、工業高校、商業高校でキャリア教育のため研究内容を発信している。最近G20国際会議のユース会議で「Future of Work」、若者世代のキャリアパスについて講演を行っている。

私は、現在、長野県と東京の二拠点で活動しているが、その観点から、昨今の若手の非常に興味深いキャリアの作り方、実はローカルキャリアと親和的であると考えます。

今後は「選択」の回数が増える時代に入っていく。日本人の20代後半の社会人の、既に54%が転職を経験している。また20代、30代の社会人のうちの4割近く、38%が、大学や専門学校での学び直しを希望している。最初に入った会社でずっと勤め続けるのではなく、選択の機会が以前と比較にならないほど多くなっていくのではないかと考える。

転職に当たって、今の仕事と並行して何か自

分の興味があるフィールド、ボランティアや副業、兼業といった形で参画し、自分がそこで活躍できるかどうかを確かめた後に、そちらの新しいフィールドに移っていく。こうした多様な職業移行を「コミットメントシフト」として提唱する。統計を取ってみると、現在、転職者のうちの6.6%がこうした就業移行を行っている。キャリアの満足も、受け入れた組織のパフォーマンスも高くなる可能性がある。

これからは、個人にとって三つのポートフォリオを自分で考えて変える時代だと考える。一つは「収入」、お金に占める自分の活動の割合を自分でコントロールする。同時に「ミッション」、気持ちに占める割合を自分でコントロールする。三つ目に「時間」に占める割合を自分でコントロールする。この三つのポートフォリオを自分で考えて調整していく、フィットさせていくという時代である。一般に地方でのキャリア形成の方が都市部よりも不利というような言論もあるが、実はタイプが違うだけで、自分の企業だけではない、いろいろな活躍の場が広がっている、その広がっている場を組み合わせる自分の最適な働き方を調整していく、シフトさせていくという意味では、「ローカルキャリア」発で「コミットメントシフト」という働き方が広がっていくのではないかと考えている。

話題提供Ⅱ・岩本悠氏

演題「高校魅力化プロジェクト」



〈講演要約〉

私は、東京の企業を辞めて、鳥根県の隠岐諸島の高校の活性化に関わることになった。少子化で人口が減少し、20年後には存続できないと思



われる地域の高校を活性化するために、教員とPTAと地域の方たちと対話をしながら、ビジョンを一緒につくった。

学校の中だけではなく地域全体を学びのフィールドと捉えて、地域の専門人材、そのほか様々な仕事をしている人とともに、地域の課題の解決に挑戦していく、課題発見・解決型の学習を取り入れた教育を皆で行うというビジョンで取り組みを始めた。

地元の子どもたちだけでは同質性、同調圧力が高いため、多様な刺激が欲しいので、「鳥留学」といって全国から意志ある「脱藩生」を募集した。都市部から高校生が来て、学び合うということをやった結果、地域の子どもたちの学ぶ意欲、挑戦する意欲が湧いてきて、結果的にいわゆる国公立や難関大学に進学するような子どもたちが出てきて、外部からも、地元からも入学してくる割合が高まって少子化の地域ではあるが、学級数が増えた。

学んだ子たちの卒業後を見ていくと、チャレンジする子が多いという印象があるが、結果的に地元に戻ってくる割合も高まっている。

今、私が代表をつとめている財団が全国の高校への支援を行っている取り組みの一つに「地域みらい留学」がある。都市部の子たちが地域の高校に3年間進学をする、「ローカルキャリアの高校生版」を行っている。また高校生が他の日本の地域の高校に1年間留学できるという越境学習の制度を内閣府とつくった。

多様な価値観を持った生徒たちを全国から受け入れている数や割合が高い学校ほど、そこの生徒たちの主体性、多様な人たちとの協働、学びに向かう意欲、社会とのつながりといった非認知機能的な資質能力、その意識や行動が高まっていることが見えてきている。

【パネルディスカッション】

(森山) パネルディスカッションに入る前に会場から質問があった。まず「コミットメントシフト」に関連し、企業側のメリットは何かとの質問があった。

(古屋) 「自分のやりたいことが見つかった」こ

とを理由に退職を希望する若手社員が、改めて自分の会社の良さを、他の活動と比べて発見し、戻ってくることを期待される。

(森山) 学校と地域をつなぐのに大切なことは何かという質問があった。

(岩本) 学校、市町村、地域が「共通のビジョン」を共につくることが重要であると考えている。関係して一緒にやっていきたい協働のパートナーと対話をしていかなければならない。

(森山) 会場から「収入が安定するのか？」など、本音としてはどうなのだという意見が寄せられている。もしご自分のお子さんあるいは生徒が「ローカルでのキャリア」を選択していききたいと表明したときに、どう反応するか会場に聞いてみたい。なお、都市部というのは三大都市圏（東京圏、大阪圏、名古屋圏）くらいのイメージである。

(slidoを用いて会場アンケートを行った。)

1.反対する、2.賛成する、3.賛成も反対もしない（自分で決めさせる）、4.その他。

(アンケートの結果)

投票数380のうち「3.賛成も反対もしない（自分で決めさせる）」が67%で一番多い。次に「2.賛成する」が25%、「1.反対する」は4%、「4.その他」が3%であった。

この結果を踏まえて、七尾高校PTA会長の山岸さんはどう感じたか。

(山岸) 現在、地域の衰退という現実に直面している。七尾高校では、PTAの活動の一環として年に1回「親と子の対話集会」という事業を行い、生徒の悩みや気持ちを聞いて返答する試みを行っている。生徒に聞いてみると、生徒の半分くらいは地元に戻って働きたいと考えてい





るが、働くところがないとの答えであった。保護者としては、可能であれば子どもたちには地元に残って欲しいものの、地元で働くところがないことから、都市部で大きな企業に入り、良い収入を得て幸福値を高めてほしいと考えているのが現実である。「ローカルキャリア」にしても、「コミットメントシフト」にしても、「高校魅力化プロジェクト」にしても、実際、お三方のようにアウトプットまで至った事例に至るまでに労力をかける人間というのが非常に少ないと感じている。

(森山) 「ローカルキャリア」を選んでいくときに、障壁となるものは何か？

(岩本) 私のこれまでの調査・分析の中から、高校生のチャレンジ精神に影響しているのが、「何かをやってみようとしたときに周りに応援されたという経験」か「周囲から（親からも教員からも）反対される経験」かである。支えてもらったという原体験を持っている子たちが、その後も更なるチャレンジをする傾向があることが判明している。将来的な関係人口、すなわち、地元から外に出ても、地元と関わり続ける、あるいは地元に戻ってくるということにかなり影響すると思う。

(古屋) そもそも「ローカルキャリア」と「アーバンキャリア」の対立ではないと考える。コロナ以降、リモート、オンラインで普通にミーティングできるようになった。東京で暮らす、私の出身地である岐阜県内の中小企業において副業で働くことが可能となった。都会にいながらローカルで活動することも可能であることも実感する。

(石井) 一度地域に行ったらずっと同じ地域に留

まり続けるべきだとは思わない。「越境」の文脈と「ローカルキャリア」の文脈は非常に近い。学び続けていく「人生100年時代」においては「自分の学びを止めない」ということを前提としたときに、当たり前地域における活動ということが選択肢として認知されていく。ローカルキャリアも魅力的な選択肢の一つなのだとより多くの人に見ていただくことが非常に重要だと思う。

「ローカルキャリア」のうち、都市部から地方に行った人は、2パターンある。一つ目は、地方にいながら自分らしく暮らし、稼ぐタイプの人。二つ目は、自分らしくゆっくり自然と一緒に農的な、ロハス的な暮らしをする、セカンドライフタイプである。前者のパターンはこの10年ぐらいで少し目立ってきた。リモートワークの進化、DXが追い風になっていく。収入源を自分の住んでいる地域以外にも持ちながら、地域にも関わっていく。地域の企業にも関わっていくということが当たり前になるようになっていくと思う。地域の中において人を育てていくという意味でも、越境学習のような文脈の、地域でも活用できるような企画が必要であると考え。都市部、海外、地域と、越境した人の流れという視点も重要である。

(岩本) 高校、PTAで何かできるか考えたところ、高校生が多様なロールモデルと出会う機会を多くつくるのが挙げられる。そこで多様な生き方、働き方をしている人たちと多く出会うことができる。ローカルキャリアも一つのパターンだけではない。固定的な職業観や働き方だけではない生き方をしている人たちが既にいる。ローカルで学んでいる時期にそういったロールモデルをたくさん持って都会に行っていれば、自分の仕事を考える中で、選択肢の一つにローカルキャリアも含めて挙がってくる。そういう機会はなるべく高校時代にPTAなどが、多くつくってあげることが子どもたちの幸せな生き方にすぐくつなげるだろうと思う。

(森山) なるほど。多様な生き方、ロールモデルに出会うことによって、「自分自身の人生をどう紡いでいくのか」を考えることがキャリ



アデザインということになるかと思う。一方、私も高校生、大学生と話をしている、周囲をすごく気にする子たちが多いと感じる。自分自身の人生を自ら切り開いていくために必要なことは何なのかと思う。出来上がった大企業のシステムの中で生きていくということが親の望む形だと思うと、子どもたちはやはりその親のニーズを察知する。子どもたちが「自分は自分の人生を」と思えるために、どのようにして「オーナーシップ」を持ったキャリアデザインができるか。

(古屋) 先日、「日本生産性本部」という団体により実施された「18歳価値観調査」という調査の結果が発表された。その中で面白いデータがあった。アメリカ、ドイツ、中国、インド等の国と比較するデータであるが、日本人は自分のことを大人だと思っている数は少ない。ただし、環境の面、自分が学校を選択するときに自分の考えで学校を選択できたかという質問に対してイエスと答えた18歳の割合が一番高い国は、日本であった。実は日本社会はものすごく子どもの自己選択というか個性というものを尊重するという社会が出来上がりつつある。ただし、自由な選択をさせる環境になってきているが、選択をする力、すなわち選択肢から自分にフィットするものを選び取る機会、情報、力といったものを、大人側が付与できているのだろうかという疑問から、ある種「自立なき自由」になっていると思う。大人側が意図して選択肢を選び取るための情報、機会、能力といったものを提供していくことが、日本の環境における次の課題なのではないかと思う。

(森山) 「オーナーシップ」について、自分自身の人生を生きていくに当たって、周りの多くの人が取る選択とは違う選択を、実は日本では多くの人がしているということであるが、自分の中で選んだものがこれで良かったのだというように思えるためには、何か自分だけではできないような気がするが、これまでのローカルキャリア研究ではどのようなことが明らかになっているのか。

(石井) 異なる生き方を認めてあげるというこ

とは、本質的に大事なことである。個々人の働き方や暮らし方が多様化している中、「安定した生き方」と異なる生き方のはざままで自分を位置付けていく必要がある。誰も安定した収入が得られて大きな組織で働いていくことに対して安心感を持つというのは人の心理として妥当である。一方で、SNSでつながっている若い世代は、誰かが起業したとか、海外で何かを始めたとか、事業を始めたとか、いろいろ情報が入ってくるので、自分自身も、「他の誰でもない、自分らしく生きたい」という衝動に駆られる。

これもすごく人間的な本能に近い衝動で、それを押し殺して生きている人もたくさんいることも承知している。異なる生き方を選びたいと思ったときに、周りがそれを受容してあげられるのかどうか。異なる選択をした際には、その過程の中で自分がなぜそれを選んだのかという意味付けを得て、自分らしさを育てていく。その過程そのものが、オーナーシップを獲得していく。そのこと自体を皆で認めていくムードや環境をつくりたい。

(森山) 「オーナーシップ」について、私はこれまで地域づくりを行っているので、地域づくりにも通じると思う。自分の地域が「自分のまち」であると思う人が多いほど、きっとそのまちは素敵になっていく。会社も同様である。自分の会社において自分の力が生かされて、より良い業績を上げ、良いチャレンジができる場所であると思えば思うほど、その成果は出てくる。こういった生き方を一人一人がしていくために、PTAとしてはどのようなことが子どもたちに提供できるのか、どのような学びがそこにあったら良いのか。





(山岸) 従来から存在する企業がそういう考え方にマッチしているのではないかという思いがある。どちらかという、新しいビジネスを創造して、そこでキャリアを積んで満足度を得ることが示されているが、実際、子どもたちが自分で新しく起業したいとか、新しいビジネスを始めたいと言ったときに、親の立場からして起業というのは非常にリスクなので、従来からあるビジネスであれば賛成はできる、誰かの事業継承をして行うというのであれば良いかなと思う。お金を借りるなどリスクを負うことについて、「100%賛成できる。」・「子どもたちがやりたいことだから。」と言える親というのはどの程度いるのか。できれば子どもたちにはリスクを背負わずに生きてほしいと考える親、保護者の方も多いと思うので、子どもの意見は尊重したいが、もう少し広い視野を持って活動して欲しいと思う。

(森山) いろいろなヒントが出てきた。「ローカルキャリア」を必ずしもそれが良いことというよりは、自分自身が納得してその生き方が選ぶことができるのかどうか。もう一つは、これだけ変化の激しい時代であるから、変化に耐えられるようにそれぞれがチャレンジしなければいけない。変化に耐えられる力を身に付けるために、オーナーシップを高めて自らのチャレンジをしていくために、それを応援された経験が重要なのだというお答えもありました。こうした幾つかのヒントを基に、会場の皆さまに、PTAとして、あるいは親として、今後どのように自分たちの子どもたちに対し行動を起こしていこうか、何か一つ行動を決めて今日はこの分科会を終わりたい。そこで、slido を使い「行動宣言」のアンケートを行う。「今日の皆さん

のお話を聞いて、あなたはどんな行動を起こしていきますか。」その行動宣言を書いていただきたい。

最後に岩本さん、古屋さん、そして石井さんの順でお一方ずつお話を伺いたい。

(岩本) 先ほど出た話で、「リスク」ということは自分にとって一つの気付きである。自分自身経済性だけ見たらどうなのだろうとは思う。一方で、私は子どもが4人いるが、多分、東京にいたら子どもが4人もいなかったらと思う。幸福度というか、自分が自分らしく、自分にとって本当に大切な何かに役に立っているとか貢献できているという、今で言う「Well-being」なのかもしれないが、自分のいきいき度というようなものに関しては、恐らく経済性では測れない中で高まっているという感じはある。また、多様な生き方という話があった。リスクをなるべく最小限にする生き方もあれば、リスクを取って変化に対応していくような生き方もある。どの生き方が正解というのは決まっていない。高校生たちは対話をしたり、多くの人たちの出会いの中で分かっていくので、そのような機会が高校生の周りにもっとたくさんあるといいだろうと思う。

(古屋) 今、若い方にとって異質な他者との出会いの場がすごく減っている。若手社会人の調査をしている面から見ていると、子どもたちが立派な会社に入って直面するのは、「フィードバックをしてくれない上司たち」というのが現実である。パワーハラスメントと教育的指導の境目が極めてグレーになっているので、管理職側が教育的指導をしにくくなっている。そういった意味で本音を若手に対してぶつける大人たちが減っている。PTAの場というのはいろいろな大人たちがいるので、自分の地域で活動されているような方々、会社に勤められている方々の話を本音で高校生時代に聞かせることができる。親ではない大人、異質な他者のいろいろな意見を聞く機会は、社会人になった皆さまのお子さまたちが社会人になった後、ものすごく大事な経験になる可能性がある、そういう社会に今なっている。

(石井) 私は、持続可能な地域とはどんな地域だろうと、考えてきた。「将来は地域に貢献したい」「地域に戻りたい」と言ってくれる子ども





たちは結構いるが、そんな子どもたちに対して、地域の大人たちが多様な選択肢を本当に背中で見せることができているのか。そんな問いに直面している。全国のローカルキャリアを実践されている仲間たちとこの探究を引き続きしていきたいと思う。PTAの皆さんでいろいろな地域のロールモデルに会いたい、話を聞きたいということがあれば、ぜひご相談ください。

(森山) ありがとうございます。アンケートで皆さんに書いていただいた「行動宣言」を見るだけで、わくわくするような未来が描けるのではないかと思いました。本日は皆さん、本当にありがとうございました。

【参加者から寄せられた「行動宣言」の抜粋】

- ①「子供と、進学だけでなくキャリア形成についての意見交換をする機会を増やします。親の願望を押し付けるだけでは子供の真の成長に繋がらないと考えるからです。」
- ②「本音を言うと、子供達にはできるだけリスクの少ない人生、生活を送って欲しいと願ってしまいます。ただ人生は本人のもの、本人の意思や幸せを尊重し応援できる覚悟を持ちたいと思いました。その為にも子供達とは考え方気持ちを理解し合える関係性を築いていきたいと思いました。」
- ③「子供が何かをやりたいと言い出した時には、保守的な考えを横に置いた上で、話をよく聞いて十分な話し合いの時間を持ちたいと思った。最終的には、どんな時も子供を応援してやれる親でありたいと思う。その為に、私自身がこれから色々な人の話を聞いたり、色々な経験を経て成長していきたいと思う。」
- ④「古い考えに囚われているのは親の方かもしれません。経済的な事情、収入ばかりを見ず、子供がチャレンジしたいと思いついたとき、より幸福度が増すように応援していきたいと思います。」
- ⑤「起業家教育と地域連携を進めたい。生徒には地域の活性化を目指し、課題を見つけ、解決する過程を学ばせたい。アウトプットを多くし、自己肯定感を上げ、自信を持って納得がいく進路を決めさせたい。それがローカルキャリアにつながるのではないかと思う。」
- ⑥「親として子供の考えをしっかりと聞き、その上で親の考えを伝え、話し合える関係作りをしていきたい。自ら考えて判断できる考えを持つように、子が成長出来るように支えたいと考えました。」
- ⑦「地域の魅力を今の子供たちに伝えることや、子供たちが地域ともっと接する場面を作ることが重要だと認識しました。このことについて何が自分に出来るのか考え、行動していきたいと思いました！」
- ⑧「今回の講演を拝聴して思ったのは、子を持つ親のため、というより、親という名を持った大人に向けた講演だったな、と。もちろん子ども大人になるので、結果役立つかと思いましたが、10年後はこの話が当たり前になっているのか、非現実的な事なのかはわかりませんが、私としては自分の人生を仕事だけで終わらせずに、私個人の幸せや学びに繋がる活動をしていこうと思いました。人生一度だけ。だからこそ、死ぬ時に後悔しない生き方をしたい。」
- ⑨「岩本さんのお話を伺い地域の多様な大人と生徒が会う機会をたくさん設けたいという考えに自身が持てました。コロナでもオンラインを活用できます。」
- ⑩「皆様のお話大変興味深く拝聴させて頂きました。そこから逆に子供達に自主性、協調性、適応力を身に付けさせていけないといけないのでは？と感じました。学校に持ち帰り是非討論してみたいと思います。」



第4分科会 (全国高P連主管：リクルート) ※オンライン配信のみ

(テーマ) 新時代の進路選択 ～正解のない時代に、どう未来を選択していくか～

【基調講演Ⅰ】 小宮山利恵子氏

スタディサプリ教育 AI 研究所所長 / 国立大学法人東京学芸大学大学院准教授

【基調講演Ⅱ】 赤土豪一氏

リクルート「キャリアガイダンス」編集長 / 国立大学法人東京学芸大学客員准教授

1. 基調講演Ⅰ・小宮山利恵子氏

演題「正解のない時代に、
どう未来を選択していくか」

〈講演要約〉

①世界の動きについて

2045年に訪れると言われるシンギュラリティや、近年でのGAFAMの急激な成長など、テクノロジー自体やテクノロジーを活かした領域の発展がめざましい。講演内では、「コンピューターの歴史」「テクノロジーのハイプ・サイクル」「Amazon GO」などの具体的な事例をいくつか紹介した。これからの学びを捉える上で、まずは世界の動きを俯瞰かつ具体で把握し、考えを深めていくことが大切であると考えます。

②これからの学び

社会が日に日に変化していくゆえに、学び方も変わっていく必要があると考えます。特に伝えたいのが、「両利きの学び」という考え方である。『両利きの経営』（東洋経済新報社）という書籍の中で紹介されている内容を学びに援用したものだ。イノベーションには、「知の深化」「知の探索」の両方が必要と言われている。この考え方はこれからの学びにも同様のことが言えそうだ。「知の深化」は、「一定の分野の知を継続して深掘りし、磨き込んでいく行為」。対して「知の探索」は、「既

存の認知の範囲を超えて、遠くに認知を広げていこうとする行為」。「知の深化」は、たとえばテクノロジーの進化によって、より効率的に学ぶことができるようになってきた。たとえば「スタディサプリ」やYouTube等で展開されている講義動画を見ながら、自分の理解度／習熟度に合わせた個別最適な学びが容易にできるようになったことも、その1つの事例と捉える。だからこそ、「知の探索」の重要性がますます増えていきそうだ。学んだことを活かしながら、自分自身が興味をもつテーマに対して探究していく姿勢。こちらは一見効率が悪いように見えるかもしれないが、人が五感を使った体験の中で学び取れること、感じ取れることは計り知れない。深化と探索の両方をバランスよくアプローチしていくことに、これからの学びのポイントがある。



小宮山利恵子 氏



③一歩踏み出すということ

ここまでの紹介のとおり、変化が激しく正解がない時代だからこそ、一歩自分から踏み出していくことがますます大切になっているように感じる。踏み出すことで、見えてくる世界がたくさんある。個人としては、自分の価値（信用）を高める5つのステップとして、次の5つを大切にしている。「自分を棚卸しする」「自分のポジションを確認する」「オンラインで学ぶ」「足で稼ぐ」「発信する」。

2. 基調講演Ⅱ・赤土豪一氏

演題「これからの社会を生き抜く子どもたちのために保護者に求められていること」

〈講演要約〉

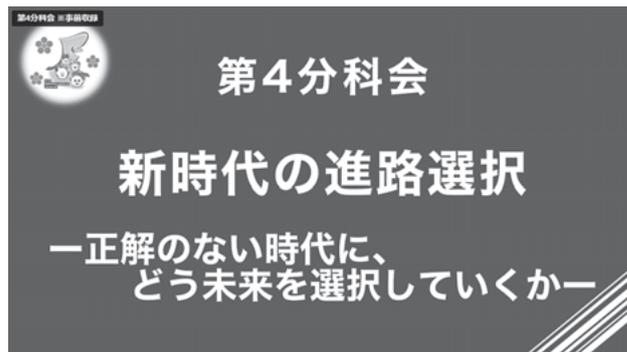
小宮山氏の講演でもあったように、社会の変化が激しい中で、これからの社会を生き抜いていくための力も変わっていく必要があると考える。実際に、これからの学力としては、「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」が定義されている。またそれらを観点として盛り込んだ入試が実施されるだけでなく、普段の授業の中においても「探究学習」が始まった。探究学習とは、自分が興味のあるテーマにおいて課題を設定し、情報を収集し、整理・分析し、まとめ・表現を行う活動である。その活動を通して、社会同様に正解のない問題に対して向き合う力、考える力を育むだけでなく、自分の生き方や在り方を考えていく。講演内では1つ探究の事例を挙げた。熊本の大学生の話だ。彼は高校の修学旅行で京都へ訪れた際に、街中に電柱がないエリアがあることに大変驚き、その足で市役所に向かい、どう実現しているのかを担当者に教えてもらった。その出来事を起点として、高校卒業後には大学で関連する研究を行うだけでなく、学外でも関連する活動を行なっている。

「自分が興味のあるテーマにおいて課題を設定し」というフレーズだけを聞くと、すこし小難し

く感じるかもしれない。しかしながら、上記例のように、自分の半径5メートル以内に、たくさんの課題の種は眠っている。大人の足なら5分で歩いてしまう通学路を、幼稚園児たちが30分でも1時間でもかけて、色々な発見を伴いながら散策することと同じように、今一度小さな発見を楽しめる力が求められてきているように感じる。よろしければ保護者の方には、今一度発見や考えをともに深める、探究のパートナーになってほしいと考える。会話を共に楽しむだけでも、十分に効果がある。安心・安全の場だからこそ、半径5メートルからのさまざまな気づき生まれ、そこから自分の学びや働くにつながるようなテーマがどんどん育っていく可能性が大いにある。実際に私たちが行なっている調査でも、「進路についてよく話す」と家庭の高校生と、そうでない家庭の高校生では、将来に対する不安感に2倍ほどの差が生じている。正解がない社会だからこそ、さまざまな気づきを親子で会話していくことで、ぜひ感じることや軸を増やしていくことを提案したい。



赤土豪一 氏





A series of horizontal dotted lines for writing.

第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

記念講演(8月26日(金))



見附島

いしずえ
輝く未来への礎

～親から始める新時代の教育～



講師

(株) ファミリーマート顧問

(前副会長・元社長)

さわだ たかし
澤田 貴司 氏

演題「やりたいことをやる」

おはようございます。澤田でございます。ご紹介ありがとうございます。このような大変素晴らしい大会にお招きいただきまして、まず本当にありがとうございます。後ほど自己紹介でもちょっと申し上げるのですが、私は小中高校と金沢にいました。高校は金沢桜丘高校だったのですが、そちらの校長先生をされていた方から、「こういう大会がある。ぜひ講演していただきたい」ということだったのですが、実は私は桜丘高校でも数年前に講演をしたことがあって、大変気に入っていただきまして、そのご縁もあってまたこうやって呼びいただきました。この大会を運営されている皆さまには大変なご苦労があったと思います。ご尽力に対してまずは敬意を表したいと思います。また、このような機会を頂いた大会関係者の皆さまに対して、本当に感謝したいと思います。本当にありがとうございます。

では、スライドを作ってきましたので、それを利用しながら皆さんにお話をさせていただきたいと思います。教育の世界とはちょっと違って、私はずっとビジネスをやってきました。ですからご参考になる部分はあまりないかもしれませんが、私が伊藤忠をはじめとしているいろいろなところでもがき苦しんで失敗も多々した、その一部をお話しして皆さまのご参考になればと思います。では始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【自己紹介】

まず、ここにいらっしゃる皆さんは、当然だと思いますが、まさかセブン・イレブンさんとか、まさかローソンさんには行っていらっしゃる、皆さんファミリーマートをこよなく愛し、ご利用いただいていると信じておりますので、まずはご利用に感謝いたします。本当にありがとうございます。これからもぜひファミリーマートをご利用いただきますよう、よろしくお願いいたします。

私は冒頭に申し上げたとおり、1957年に石川県で生

まれました。吉野谷村という、ここから小一時間かかるような非常に山奥で生まれた人間です。小学校は12人ぐらいしかおらず、今は各地で起こっていると思うのですが統合に次ぐ統合で、吉野谷村の市原小学校という学校だったのですがもうなくなっています。そういう所に生まれました。高校は金沢桜丘高校に行きました。金沢でいうと中の上ぐらいのランクでしょうか、そういう高校でした。一生懸命勉強したのですがなかなか難しい高校がいっぱいあって、何とか金沢桜丘高校に入学させてもらいました。あまり勉強が得意ではなくて、350人ぐらいの同級生がいたのですが私は300位ぐらいだったでしょうか。ただ、このままではやばいと高校3年生の頭によく気付かしまして、一生懸命勉強して一時期10番以内ぐらいに入りました。入ったのですがガス欠を起こしまして、残念ながら元に戻ってしまいました。

大学もいろいろなところを受験しました。関西の大学とか東京の大学を受けたのですが、全部滑って1年間浪人しました。金沢にいと友達もいっぱいいてあまり勉強しないということで、京都に叔父と叔母がいたので、京都の予備校へ行って勉強しますと自分から言って京都に行きましたが、結局、予備校には1日も行かずに独学で、自分で勉強しました。翌年、何とか上智大学に拾ってもらい、1977年に入学しまして、おかげさまで4年間





で無事に卒業しました。

ちょっと戻りますが桜丘高校時代、私は野球部に所属していました。桜丘高校の野球部は今でも強いと思うのですが、当時は甲子園の常連校でした。星稜高校と桜丘高校が常に競い合っていたようなときで、私の同期も甲子園に行きました。私も中学校時代に野球をやっていて、山奥でやっていて大したこともないのに「俺は長嶋茂雄になる」と思っていました。当時、巨人の長嶋といえば4番か3番でサードでした。私はサードをやっていて、打順は3番か5番だったので長嶋になると勘違いして、桜丘高校に入学して野球部に入りました。ところが、練習がめちゃくちゃきつかったのです。残念ながら私はあまり根性がなくて、このままでは勉強もできないし、先輩にボールも持たせてもらえないし、バッターボックスにも立たせてもらえないと、思い切り人のせいにして半年で「やめた」ということでやめてしまいました。その後、スキー部に入ったのですが大した練習もせず、野球部はやめるし、中途半端にいろいろなことをして、受験すれば浪人するしということで、高校時代はあまりいい思い出がなくて、私にとっては結構暗黒の時代でした。

大学に入ると、キャンパスで各部の新生リクルーティングみたいなものがあって、スキー部をのぞいたら楽しそうで、あまり根性がありそうな人もいない、高校でスキーをやっていましたのでスキー部に入ろうかなと思ったのですが、隣のブースにアメリカンフットボール部のブースがあってそこものぞいたところ、いかつい人たちがいっぱいいらっちゃって、ものすごく勧誘を受けたのです。「澤田君、なかなか体格がいい、目つきもいい。ぜひうちに来たまえ」などと言われて調子に乗ってしまったのと、「夕方に同じ場所に来てくれたら、みんなで飯に行くので、行かないか」と誘われて、上智大学は四ツ谷にあるのですが、四ツ谷駅の近くの焼き肉屋みたいなところに連れていってもらってしこたま肉を食べさせてもらったのです。素晴らしい、毎日肉を食べさせてくれると思って、えらい勘違いだったのですが気に入ってしまって、アメリカンフットボール部に入部しました。そして高校時代に中途半端で終えてしまった野球のようには二度としまい、アメフトは何とか続けていこうということで4年間一生懸命頑張って、4年生のときにはキャプテンをやらせていただきました。

その後、伊藤忠に入社しました。大学の成績はあまり良くありませんでしたから、私が伊藤忠に入社できたのはアメリカンフットボール部、体育会でキャプテンをやっていたから、ただただその理由だったと思います。

伊藤忠に入社して16年勤務させていただいて、いろいろなことをやりたくなった。それが今日の演題の「や



りたいことをやる」なのですが、やりたいことをとにかくやるぞといろいろなことを考えることが多くなり、伊藤忠に退職願を出して当時のユニクロに行きました。ユニクロは私が入ったときはとても小さい会社でしたが、今は大変立派な世界企業になっています。柳井さんは今、日本一のお金持ちです。その柳井さんの下で5年間働かせていただきました。

その後、考えるところがあってユニクロも辞めて、KIACONを創業しました。KIACONというのは、ローマ字で書くとちょっとカッコいいのですが、何のことはない「気合」と「根性」を足した名前です。この会社は3年もたずにたたみました。それから今度はREVAMPという会社を立ち上げて10年間くらいやっていたのですが、当時の伊藤忠の幹部から、「ファミリーマートがサークルKサンクスと統合する。日本の流通界で過去一番大きな経営統合だ。その統合を澤田君、ぜひおまえにやってもらいたい」とお誘いを受けて社長になりました。去年の2月まで社長を務め、その後副会長を1年やらせていただき、今年の3月から顧問を務めています。

【父の葬儀】

両親は小中学校の教師だったのですが、おやじは59歳のときに事故で亡くなりました。山歩きがとても好きで、朝、山を歩いて山菜を採ってきて、それを料理して食卓に並べて食べるのが大変好きな男でした。彼が亡くなった日というか事故に遭った日は、私には姉がいるのですが、姉が婚約して婚約者と一緒に帰ってくる日でした。秋だったのですが、おやじはすごくうれしくて、栗ご飯を食べさせようというので山へ栗を拾いに行きました。それで崖から転落して頭を強く打ってしまい、1週間頑張ったのですが亡くなりました。母親も先日、6月17日に92歳で天国に召されました。彼女も教員で、私はそういう素晴らしい家庭に生まれ、育ててもらいました。

特に父親は、「勉強しろ」とはほとんど言わず、そういう面については放任主義でしたが、人としての在り方には非常にうるさい人でした。例えば、田舎だったので、田んぼのあぜ道を歩いているときに前にお年寄りが重い



荷物や鍬を持って歩いていたりすると「貴司、手伝いなさい」と、誰か分からないおじいちゃんおばあちゃんの荷物をおまえが持てとうるさく言われましたし、「挨拶は自分がしろ。人からされてする挨拶なんていうのはいないだ」みたいなことを随分言われました。「目上の人を大事にしなさい」「いろいろなことに感謝しなさい」と、人としての在り方をとにかくうるさく言ったおやじでしたが、今となっては本当に感謝しています。

次に、人生における大きなターニングポイントということで、生きる意味を考えるとちょっと難しい話なのですが、先ほど申し上げたとおり、おやじは私が27歳のときに突然アクシデントで亡くなりました。私は長男で、喪主を務めました。私のキャリアは先ほど申し上げましたが、18歳のときに家から出て京都に行き、そして大学に合格して東京に行き、就職しても伊藤忠ですから東京にいて、1年強はアメリカのニューヨークにも行っていて、要はずっと田舎から出て外にいました。高校を入れると15歳くらいから家を出て下宿生活をして、あとは京都、東京、アメリカと、本当に外で生活していました。ですから15歳から27歳までの12年間、高校時代は月に何回かは帰っていましたが、大学になると体育会の運動部もやっていたので年に2、3回ぐらいしかおやじと合わない生活が続きました。そういう中でおやじが突然亡くなって、長男なので喪主をやりなさいということで喪主を務めたわけです。

そのときに、私は本当にショッキングな光景を目の当たりにしたのです。今日ものすごい数の方が参加されていますが、おやじの葬式にもものすごい数の方が参列してくれたのです。今はコロナで葬式といってもあまり参列しない、行きたくても行けないような環境が続いていますが、当時、すごい数の方々にご参列いただきました。そして、私は喪主ですから来る方皆さんが私のところに来られて、「お父さんに本当にお世話になった」と話されるのです。教え子の方もいらっしゃれば、飲み屋のおばちゃんや教員の方もいらっしゃれば、いろいろな方が私の前に来て異口同音にお世話になったとお礼をされました。6月に亡くなった母親の葬式のときにも、コロナでなかなか参列してもらえなかったのですが、やはり同じように「本当にお母さんにお世話になりました」「仲人をやっていただいて感謝しています」「今があるのはお父さんやお母さんのおかげです」と本当に多くの方に言われました。

これは私にとっては本当にショックな出来事でした。例えばファミリーマートという会社でいうと、ファミリーマートは3兆円売っています。また、麒麟さん、サントリーさん、明治さん、ロッテさんとかいろいろなところから仕入れをさせてもらっていて、大体2兆円の取引

を各メーカーさんとやっています。経済的ないろいろなコネクションがあるわけです。私はもう社長ではないですが、例えば社長の在任中に亡くなってしまうと、葬儀は大変なことになると思います。しかし、私の母にしても父にしても、葬式に来てくださった方々とは経済的なつながりは全くないのです。そういう中でそれだけたくさんの方がお見えになって皆さんに感謝されるというのは、正直かっこいいなと思ったのです。人間というのはこんなに感謝されることがあるのだ、亡くなったときにこんなに感謝されるような人間になりたいと思いました。

要は、自分の価値はこういうときに出てくるのだと。自分が生きているときにどんなことをやったらこれだけの人に喜ばれるのか、そういうことをとにかく強烈に頭におち込まれました。そのときはただすごいなと思っていたのですが、その後、日に日にそう感じるようになり、私は今年65歳で、あと何年生きるか分かりませんが、亡くなったときに1人でも多くの人に手を合わせてもらえるような生き方ができればうれしいなと思うようになりました。

それにはどうすればいいかというと「利己」ではなくて「利他」だと思うのです。私はおやじにいろいろなことを教えてもらいましたが、自分さえよければいいという部分もたくさんあって、まだまだ利己的な人間です。しかしおやじは、その姿を見ていて、亡くなったときにいろいろな方々から言われた言葉を聞いて、利他だったのだらうと思います。やはりいろいろな人に尽くしてきたからこそ、亡くなっているいろいろな人たちに感謝される、そういうことを彼は身をもって実行してきたのだなと思いました。

【伊藤忠】

伊藤忠に1981年に入社しました。上智大学でのアメリカンフットボール部キャプテンという経験が功を奏したと思っています。その年は160人ぐらい合格して入社しました。私は2年目に人事部から「君、ニューヨークに行きたまえ」ということで、ニューヨーク勤務を拝命しました。伊藤忠というのは全世界に支店があって、そこに若手で優秀かどうかは分からないのですが、将来を嘱望されている人間が派遣されるような制度がありました。なぜ私がニューヨークへ行っただけと命じられたのか分からないのですが、ラッキーにもニューヨークというのはその中でも一番いい所です。入社して2年弱、1983年の頭にニューヨーク支店に着任しました。

私はニューヨークで1年間勤務するに当たって自分に課した目標があって、それは英語ぐらいいしゃべれるようになって帰ってこようということです。語学研修はないので自分で勉強するしかありません。そこで、日本人



とはあまりしゃべらず、とにかくアメリカの人と友達になりまくって、朝から晩までしゃべり倒そうと思ってニューヨークへ行きました。ところが、勤務地はマンハッタンにあったのですが、当時は治安が悪く危険だったので事務所も日本人だらけでしたし、住むところも单身寮や単身寮などいろいろあって、日本人がみんなが集まって生活していました。日本人が生活している場所で生活して、通勤も日本人と一緒にして、オフィスに行くと日本人ばかりでランチも日本人と一緒に、ご飯も日本人と一緒に、週末になるとゴルフの運転手をやれということです。ですから、英語をしゃべろうという目的は全く達成されませんでした。

こちら辺から伊藤忠の中でやりたいことをやるということで暴れはじめたのですが、今のままだと英語が話せるようにならないということで、「ニューヨークでは私は勉強ができない。日本人がいない所に飛ばしてくれ」とニューヨークの人事本部長と本部にかけあって、こんなことは前代未聞だと言われたのですが、テキサス州のヒューストンというアメリカの下の方に飛ばしてもらいました。日本人は誰もいません。ですから、ありがたいことに朝から晩まで英語漬けです。テレビも英語ですし、アメリカ人のファミリーの家に下宿して朝から晩まで英語をしゃべりました。延々英語です。ヒューストンには10カ月くらいいましたが、おかげさまで英語が話せるようになりました。これがやりたいことの一つです。

仕事面では、伊藤忠に新入社員で入ると、大体下積みをやらされるのです。どういうことかということ、営業の先輩方は物を買って物を売る、世界中から物を仕入れて世界中に売るといって仕事をしています。あるいは世界中から物を買って日本に輸入するとか、日本のメーカーさんから買って世界に輸出するというような仕事をやっていました。下積みというのは、さらさら輝く先輩方が、電話1本で「買った」「売った」と英語でやったものを、「おい、澤田君、これ決まったから後はやっておいてくれ」と言われるわけです。私は化学品の部門にいたのですが、「澤田君、アメリカのダウ社と1万トン何々を契約した。何月に船積みして日本に輸入して日本のどこのタンクに入れて、それをどこそこのメーカーに持っていきなさい」と言われるわけです。

商売が決まると何をやらないといけないかということ、まず船会社に連絡して船を手配します。「1万トン、何々というケミカルです」。それから、貿易では必ず保険をかけなくてはなりません。「こういうケミカルです。保険をかけてください」。あとは「日本に何月何日に到着しますので、日本の受け入れタンクはここにします」「メーカーさんには何月何日にデリバリーします」と連絡しなくてはなりません。あと、レターオブクレジット

とって、輸入する場合には信用状を開きます。いろいろな手配が必要です。そういう細かいことを、3年、4年、5年と延々とやらされます。あとは予決算といって予算と決算を作ったり、資金繰りも必要で、現金の出納の計画を全部組めということでやらされます。物を仕入れるとお金を払わなくてはなりません。払うと現金がなくなりますのでそれをどう補填するとか、いろいろなことをやらなくてはなりません。そういう細かい仕事を5~6年やって、やおらそれができるといことになるので営業デビューで、自分で商売をするようになります。

ありがたいことに私も商売をやらせていただきました。私の仕事は欧米のメーカーさんから物を買って日本に輸入するとか、三国間貿易というのですがフィリピンやインドネシアなどアジアのいろいろな国に物を売るという仕事をしました。デビュー当初、私に任されたのは100億円の商圏でした。「おい澤田、100億の商売があるから、これをおまえはやれ」ということでやりはじめたら、半年ぐらいたってだんだん雰囲気がおかしくなってきたのです。何が起こったかということ、欧米のメーカーさんは極めてドライなのです。要は、自分たちのお客さんが分かった瞬間に、日本の商社の機能など要らない、伊藤忠なんて要らない、自分たちで物を売るということになってしまうのです。今はまさにそんな状況になっていると思いますが、当時はそういうことが起こりはじめた時期で、私が担当して半年くらいしたら、欧米のメーカーさんから「伊藤忠さん、来てください」と言われて、「もう来月からお宅との商売は辞めます。あとは自分たちでやりますから、伊藤忠は要りません」と宣告されたのです。

私が100億円の商売を先輩から受け継いで半年たったから、100億円が突然なくなってしまったのですから、それはびっくりしました。責任問題だと思いました。担当の課長さんとか部長さんは「澤田、どうなってるんだ」「おまえ、何をチョンボしたんだ」「こんな100億ものでかい商売がなくなるなんてどういうことだ」「おまえの責任だ、責任を取れ」と、えらく怒られました。

ただ、面白かったのは、これも「やりたいことをやる」というところにつながるのですが、東南アジアのお客さんから悲鳴が上がってきたのです。澤田さんや伊藤忠さんがやってくれないと、欧米のメーカーさんが例えば100トン欲しいところを50トンしか出さないとか、いろいろ強気で交渉してくると。私たちは、50トンはこのメーカーから、あと50トンはこのメーカーから持って来て、一緒にして100トンとか、私たちは融通を利かせてお客さんのためにいろいろアレンジしていたのです。それが欧米のメーカーが直接やりはじめると、値段は上げる、量は絞る、いろいろなことをやってきたのです。



それでユーザーさんから「澤田さん、同じ物をあなたが持って来てくれたら、あなたから買いたい」と言われて、注文がばんばん入るようになったのです。

ただ、残念ながら私たちは欧米のメーカーさんと商売をしていましたので、日本のメーカーさんからすると伊藤忠は敵だったのです。日本のメーカーさんは、例えば三菱商事さんとか三井物産さんと一緒になってアジアに物を売っていたのです。私はアメリカやヨーロッパのメーカーから買って売っていたので、競争相手だった。ですから、「今さら何だ、今さら俺のところをどの面下げてお願いしに来てるんだ」ということで、日本のメーカーはどこも取り合ってくれなかったのです。なかなか苦しいところがあって、半年ぐらいはもがきました。そしてたどり着いたのが旭硝子、今は AGC という会社です。旭硝子がアメリカのいろいろな技術を駆使して新しいプラントを作って、そこで澤田さんが取り扱っている商品を生産して販売する予定だと、旭硝子さんが同じ物を作るという話を聞きつけて、もうそこから旭硝子に日参です。「ぜひ伊藤忠と取引をしてください。ぜひ私と商売をやらせてください」と頭を下げ続けて、やらせてもらえることになりました。

最初は確か 500 トンぐらいの少量だったのですが「伊藤忠さん、澤田君にこれを預けるから、これで商売をやってみろ」ということで預かって、おかげさまで何とかその商売が決まりまして、それからあれよあれよと、300 億円ぐらいの商売まで発展しました。

そのときも諸先輩から「澤田君、もうこんな商売は辞めろ」と言われたのですが、お客さんがいて、欧米メーカーからいろいろなことを言われてこんなに苦しんでいる、これはチャンスだ、絶対にもう一回お客さんを取り返して報いてやろう、「やりたいことをやろう」と信じてやった結果、100 億がゼロになって 300 億になったということで、これもやりたいことをやるにこだわってやった結果、できた商売でした。

それから、サウスランド・コーポレーションというセブン・イレブンの本体がアメリカにありました。それを日本のセブン・イレブンが買収したので、アメリカの会

社なのですが今はオーナーが日本の会社になっています。そのアメリカのセブン・イレブンが、1992 年に経営破綻を起こして倒産してしまうという危機がありました。伊藤忠は、そもそもセブン・イレブンをアメリカから持って来てイトーヨーカドーさんに紹介したという経緯がありました。そういう関係上、イトーヨーカドーさんから「伊藤忠に紹介されて今日のセブン・イレブンジャパンがある。セブン・イレブンの親会社が倒産したので、伊藤忠さんとイトーヨーカドーで一緒になって親会社を買収して再生しよう」というご連絡を頂いて、伊藤忠とイトーヨーカドーとセブン・イレブンジャパンが一緒になって、当時の金額で 700 億円でアメリカの会社を買収するという再生プロジェクトが始まりました。私は化学品の仕事をしていたのですが、なぜか「澤田君が担当をやってくれ」ということで、担当させてもらうことになりました。

このとき、イトーヨーカドーの伊藤名誉会長、イトーヨーカドーを創業した方で今でもご存命で 97 歳か 98 歳ぐらいのお年になったと思うのですが、この方とアメリカに出張に行きました。日本でもセブン・イレブンやイトーヨーカドーの店舗を一緒に回らせてもらったことが何度もあるのですが、先ほどのおやじの話もそうなのですが、彼と一緒にいて私は本当に多くのことを学びました。

一番学んだのはアメリカに行って名誉会長とセブン・イレブンの店舗を回ったときで、会長はずっとメモを取っているのです。まず店名をメモして、例えば店が汚いとか、店員に質問すると英語がしゃべれる人がいなかったとか、12 時のランチタイムに物がほとんどなくなってしまっているとか、あるいはチェックしたら賞味期限が切れているとか、何店舗も回るので、名誉会長は極めて細かいことまで全部メモしているのです。

ガラスにサウスランドタワーというサウスランドのビルがあって、セブン・イレブンの経営陣はその最上階にいます。買収した後ののですが、破綻した会社の経営陣がタワーの最上階にいるのです。そこに伊藤名誉会長が行って、メモを見ながら向こうの経営者に対して、当然、日本語なのですが、「おまえら、恥ずかしくないのか！」みたいな感じで烈火のごとく怒るのです。「私は何店舗行っただけでこうなっている、汚い。この店は商品がない。この店はサービスが最悪だ。おまえらが体たらくだから店はこんなことになってるんだ。加盟店さんがかわいそうだろう、お客さんがかわいそうだろう。恥ずかしくないのか、きさまら！」と、トップ自ら現場に行っただけで、しらみつぶしにいろいろなことを確認して、それを「恥ずかしい」と涙ながらに怒るのです。感動しました。

私は伊藤忠で商売をやっていました。私の仕事というのは全部自分中心です。お客さんがいらっしやっただけ



いろいろなことをアレンジはしていましたが、やはり伊藤忠というのは貿易商社ですから、いかに安く買っていかに高く売るかということをやっていたのです。今は伊藤忠、商社も変わってきましたが、当時は間に入ってマージンを抜く、口銭を抜くという仕事でした。そういう仕事をやってきた自分にとって、名誉会長の行為は本当に学ばせられるもので、「人のためになっていない。加盟店のためになっていない、お客さんのためになっていない、恥ずかしい」「おまえら仲間だろ、仲間がこんな体たらくでどうするんだ」みたいなことを彼は言うのです。すごいな、やはり名誉会長は利己ではなくて利他、人のためにめっちゃくちゃ仕事をしているのだなと感動して拝聴していました。

4年ぐらいそういう仕事をやって、おかげさまで買取もうまくいって、再生もだんだんうまくいきはじめました。その中で湧いてきた思いは、日本にはコンビニエンスストアが6万店ぐらいあって、売上でいうと10兆円ぐらいあります。食品でいうと30兆円ぐらい、アパレルで15兆円ぐらい、いろいろなものを入れると日本の流通業、小売は140兆円あります。140兆円というとんでもなく大きいマーケットが現存するのです。そういうマーケット対して伊藤忠は今まで誰も着手してこなかったというものでした。イトーヨーカドーさんやセブン-イレブンさんが素晴らしいビジネスをそこで展開している。伊藤忠には人材もいれば、お金もあれば、海外のネットワークもある。4年間セブン-イレブンさんやイトーヨーカドーさんと仕事をさせてもらって、伊藤忠こそ小売業に自ら突っ込んでいくべきだ。伊藤忠こそセブン-イレブンやイトーヨーカドーみたいなビジネスをやるべきだと思って、私は1995年12月27日に、「伊藤忠こそが小売業に突入し、その事業をやるべきだ。やらせろ」と、社長に手紙を書きました。今までは事業ではなくて、ちょっと出資をしてイトーヨーカドーさんやセブン-イレブンさんに物を売る仕事をやっていたのですが、そうではなくて事業をやる、チャレンジをさせてくれと、1995年12月27日、年末ぎりぎりの最終出勤日に手紙を書いたのです。

伊藤忠では毎年、仕事始めの日に、社長が全世界の伊藤忠のグループ社員に対してメッセージを出します。「今年の戦略はこうだ、みんなここに向かって走るぞ」と、トップが年頭挨拶をするのですが、1996年1月4日、室伏社長の年頭挨拶に、私が書いたことがそのまま、「伊藤忠は小売業に行くんだ」みたいなことがバーンと入っていたのです。「それ、俺が書いた文章のコピペじゃねえの」ということで、びっくりしました。感動しました。社長が「伊藤忠は小売業に出るんだ」と、宣言してしまったのです。

それが出た瞬間、また「社長、言いましたよね。それは私がやります。だから私に予算と人をくれ」と社長に手紙を書いてお願いして、その後、社長から「分かった。人事部の誰々と経営企画の誰々、常務とか専務とかさぐいおっさんたちに言うておくから、おまえはそいつらに話して予算も人事も全部やってくれ」とお墨付きを頂き、予算も年間2億円頂いて、人も私が指名した人間を全部もらって、「やってみろ」ということでやりました。自分のやりたいことができるということで、本当にうれしかったです。必死でやりました。「よっしゃ、伊藤忠の中で企業内起業、企業の中で企業をつくるということが自分でできるんだ」ということで、燃えに燃えました。35～36歳だったでしょうか。

「やるんだー」という感じで頑張っって企画をまとめて、経営会議でプレゼンをするのです。専務とか常務、社長、副社長などがずらっと並んでいる前で「澤田でございます。弱冠課長でございます」みたいな感じでプレゼンをするのですが、却下です。「時期尚早」「詰めが甘い」「こうなったらどうなる」「あんなったらどうなる」。駄目を言うのは誰でも言えるのです。「こんな場合はどうする」「あんな場合どうする」「うるせえ、このくそじじい」みたいな感じです。本当にもう微に入り細に入り心配されるのです。もうこのじじいたちは仕事ができないと思いました。当然ですが、36～37歳の私ですから、詰めがめっちゃくちゃ甘いのです。今でもレポートを持っていますが、今見返すとめっちゃくちゃ甘いレポートです。思っただけつんのめって空回りしてしまって提案した内容で、「時期尚早、見送り、却下」。この2年間の自分は何だったのかみたいな感じで、悲しかったです。それで社長室に飛び込んでいって、「社長、言ったこととやっていることが違うじゃないですか」と言ったら、後で大変な目に遭いました。人事の常務が飛んできて「おまえ、社長室に行って、どう思ってるんだ」みたいなことを言われて、本当にドラマのような世界で、まあいろいろな人に怒られました。私はそのとき、自分は小売業をやる、絶対に小売業でトップになってやる、見返してやるという強い気持ちを持ちました。そして、それは伊藤忠の中にいたらできない、これはもう辞めるしかないと思って、伊藤忠に辞表を出しました。

【ユニクロ】

当時37歳で、子どもも2人いて食べていかなくはいけません。マンションも東京に買ったばかりで、多額の借金をしていました。ですから働かなくてはいけない、何かやらなくてはいけないということで、今は立派な会社ですがリクルートに人材登録しました。「36歳、上智大学出身。伊藤忠でこれだけの年収をもらっていま



す。子ども2人」と書いて出したら、リクルートからご連絡を頂いて、山口の宇部にファーストリテイリングという会社があって「ユニクロ」という店をやっているというのですが、東京には店舗もなく「ユニクロ？ 何じゃそりゃ」と思いました。しかし、リクルートの方が「柳井さんという方がいらっしゃって、彼は本当に面白い、ユニークな方なので、一回お会いしたらどうですか。きっと澤田さんとは息が合うのではないかと思います」と言われて、山口県の宇部に伺いました。

山口県の宇部のずっと郊外に行くと本当に小さな倉庫みたいな建物があって、雨が降ると雨音ですごくうるさいような倉庫で会社をやっていました。そこに柳井さんはいました。柳井さんと出会って、私がやってきたこととお話しました。そしたら柳井さんは、「澤田さんみたいな人と僕はやりたかったんだ」と言うのです。「あなたの経験は貴重だ。伊藤忠で貿易をやった、海外にもいらっしゃった、小売業を立ち上げようとした、セブン-イレブンも学んだ、あなたみたいな貴重な人はいない。だから私と一緒にやりましょう」みたいなことを言われたのです。「アパレル、日本の衣料品マーケットは15兆円ある。15兆円であなたと組んでいい物を自分たちで作って、自分たちで持って来て、自分たちの店で売る。垂直で統合して最高の品質の物をお客さんに提供できれば絶対に成功する。あなたと組みたい」と、伊藤忠の経営陣にめっちゃくちゃ否定されたものを柳井さんは全部肯定してくださったのです。「そのとおりだ。あなたの言うことが正しい」みたいな感じで言うので、私も興奮してしまって、柳井さんも興奮してしまって、全然知らない会社だったのですがその日の最後には「お世話になります」と握手をしていました。

ただし、条件としては、せこかったのですが「伊藤忠の給料は1年だけ保証してください。1年で駄目だったらクビにさせていただいても結構です」と。伊藤忠はやはり給料が結構高かったし、借金も大きかったので1年だけということ、もう駄目だったら家を売ろうと思っていたのですが、何とかなるだろうということで1年だけ保証してくれと言いました。もう一つは、店長候補で入

れてくれと言いました。現場に行かないと、店長にならないと絶対にトップに上がれないということで、店長候補に入れてもらうことと伊藤忠の給料を1年だけ保証してもらうということで入社しました。

柳井さんと約束して入社して、現場の店舗で働きました。現場の店舗で働いていると、柳井さんが面接のときに言っていたような彼の理想と現場で起こっていることが、やたら違ったのです。みんながユニクロの洋服を着ていると思ったのですが、誰も着ていない。「何で着ていないのですか」と聞くと、「澤田さん、洗うと縮むんですよ、商品が」とか、「色が落ちるんですよ」とか、「そもそもデザインがダサイんですよ」とか、コマーシャルが流れていたのですが「めっちゃくちゃダサイ」とかと、文句ばかり言っているのです。柳井さんが面接で言っていたのと現場がえらく違うので、「柳井さんが言っていた理想に対して、現場はこうなっています」と、私は毎週レポートをまとめて、柳井さんにファックスで送っていました。すると2カ月たって柳井さんからご連絡を頂いて、やばいな、本当にいろいろなことを書いて出したので、クビになるかもしれないと思いながら山口の本部に会いに行きました。

柳井さんは、私のレポートを全部持っていて、全部読んでいました。赤線を引いてあって、「澤田君、あなたの言っていることは全部正しい。全部正しいので、今日から経営企画室長をやってくれ」と言われて、入社して2カ月で私は経営企画室長になってしまいました。本部に全部課題があるはずだから、本部改革をやろう。君がやってくれ。このレポートに書いてあることは全部正しいので、おまえが責任を持ってやってくれということで本部改革をやりはじめて、そしてまた2カ月やって、商品本部が腐っていると、またレポートを書きました。商品本部の社員が自社の商品を愛していない。愛していない商品をなぜお客さんが愛してくれるのかというようなことを書きました。そしたら「じゃあ商品本部長をやれ」と言われて、またその日に、入社して4カ月で私は商品本部長になってしまいました。それでまたが一つとやっていたら、株主総会の1週間前に「澤田君、株主総会があるから役員になってくれ」と言われて、何の約束もされていませんでしたが役員になりました。役員になると取締役会があって、その日にいろいろな役付き役員などを決めます。専務は誰にする、代表取締役社長は誰、常務は誰というのを取締役会で決めるのですが、それで私は常務になりました。入社して半年で常務、いきなりナンバー3です。それでまたが一つとやっていたら、半年後に「澤田君、副社長をやれ。ナンバー2になれ」ということで、何と私は入社してから1年くらいでばんばんプロモートさせていただいて、給料も倍、4倍とすごい





勢いで上がりました。

そのようなことをやらせてもらいながら私が考えていたのは、「違和感」です。店舗で働いていて、なぜこれだけ多くの社員がこんなに不安を持っているのか、何に違和感を覚えているのだろうかということをしごく考えました。また、しごく聞きました。しごく教えてもらいました。それを全部柳井さんにぶつけました。「柳井さん、このままでは会社がやばいよ。直しましょうよ。直さないと駄目になりますよ」と話を随分しました。要は、「何が正しいか」ということです。柳井さんが正しいのではなくて、何が正しいかということに徹底的にこだわってやりました。そういうことをやってユニクロは改革が始まっていきました。

それによって、おかげさまでユニクロはしごく成長しました。私が入ったときは400億円の売上で20億円の利益でした。これもすごいです。広島証券取引所に上場していたのですが、時価総額が200億円ぐらい、時価総額というのは皆さんにはあまりなじみのない数字かもしれませんが、企業の価値です。企業の価値を測る数字なのですが、200億円ぐらいの会社でした。それが何と5年で売上が4000億円、利益は1040億円、時価総額は1.4兆円になりました。200億円が1.4兆円、今は多分7兆円です。そんな会社になってしまいました。そんなことが起こってしまったのです。要は、「何が正しいか」です。伊藤名誉会長にしごくご指導いただいて、お客さんがどう思っているのか、社員はどう思っているのかということを実際に叩きこまれて、ユニクロではそれを実践させてもらいました。それをやることによってどんどん会社が変わっていきました。

そうこうしているうちに、柳井さんから「社長をやれ」と言われました。そう言われたとき、うれしかったです。ただし、柳井さんは創業者です。絶対オーナーで創業者です。その下で社長をやるというのは、私にとって何の意味があるのかなと思いました。また、やる自信もありませんでした。そう思って、「柳井さんの下で社長はやれない」とお断りしました。ということで、5年目に辞めてつくった会社がKIACONです。

【KIACON (キアコン)】

KIACONはどういう会社かということ、「気合」と「根性」を足した会社なのですが、当時、私はアメリカにたくさん友人がいて、アメリカに毎月のように行っていました。アメリカでは当時、伊藤忠とイトーヨーカドーがセブン・イレブンを買収したようなことが、ばんばん起こっていました。1992～1993年に起こったことが、2000年を越えていろいろなところで起こっています。いろいろなファンド、お金を持っている人たちが

立ち上がって、企業を買収して整理する、良くして売却するということが起こっていたのです。日本でもいよいよそれが起こるということで、アメリカの投資家たちと話をし、「澤田貴司に650億預ける」と言う人たちが出てきて、私は650億預かりました。650億預かって当時やったのは、ダイエーの買収です。ダイエーの関係者がいらっしゃるかもしれませんが、当時、中内さんという素晴らしい方が創業されたのですが、破綻して苦労されていました。それを買収して良い会社にするというプロジェクトがスタートしました。

日本の流通業の100社ぐらいが提案しました。イトーヨーカドーさんもイオンさんも、いろいろなところが提案して、私も提案しました。新聞の見出しに「ダイエー支援、3候補に」ということで「イオン 丸紅 キアコン」と書いてあります。KIACONは私の会社です。日経の一面に私の会社が載ってしまうというばかげたことが起こってしまったのです。買収ということで選ばれたのです。100社が手を上げて残ってしまって、ダイエーを買って私が社長になるという提案書だったので、私はひょっとしてダイエーを買ってしまうのではないかと、まあいろいろなことを考えました。それに対して、いろいろな人がいろいろなことを言いました。「澤田さん、お金を預けてくれた人のために働きはじめるのですか」「あなたは企業や人のために働くと言って、金のために働くような澤田さんになっていくのではないですか」みたいなことも言われました。買収、再生というのは、聞こえはいいのですがやることは結構激しいです。「本当に澤田さんはそういうことをやりたいのですか」というようなことを言われて、内心悩みました。悩んだ結果、選考に漏れました。最後は丸紅さんに負けました。KIACONは脱落ということで負けて、その瞬間、よかったと思いました。

【REVAMP (リヴァンプ)】

私は純粋に、そんなにお金は集まらないかもしれないけれども、ユニクロでいろいろ頑張って若干自分のお金はあったので、人のお金ではなく、自分たちのなけなしのお金でいろいろな会社に投資をして良くしていきたい。とにかく純粋に企業を元気にする会社をつくりたいということで、ファンドはやめて2005年につくった会社がREVAMPです。後に、私がユニクロの社長をやらないということで断って、やってくれたのが玉塚君という人です。ローソンの社長やロッテの社長もやった男で、彼もユニクロを辞めて私と一緒に会社をつくりました。今、REVAMPには300名ぐらいの社員がいて、素晴らしい会社になりました。



【ファミリーマート】

10年ほどそんなことをしていました。室伏社長に先ほど申し上げたような手紙を書いて10年、20年たつて、今、伊藤忠は岡藤さんという方が会長をされているのですが、岡藤さんからご連絡を頂いて、「ファミリーマートは売上2兆円、1万2000店舗。サークルKサンクスは売上1兆円、6300店舗。2兆円と1兆円、1万2000店舗と6300店舗が一緒になる、こんな大きな統合は過去にないし、世界でも類を見ない。その統合がいよいよ始まる。「その統合を、澤田君、君にやってほしい」と。「君は昔、伊藤忠にいたけれども、その後もいろいろなところで頑張ってくれた。そういう経験を全部生かしてやってくれ」と言われて、先ほど申し上げたとおり、「やっぱ来たか。これは俺にしかできないだろう」と思って、本当にうれしかったです。お受けすることにしました。

この申し出を受けるに当たって、いろいろなことを思いました。やはり社長をやってくれということの間が若干あったのですが、いろいろな店を見ました。あとは新聞や雑誌などいろいろなものを見たりして、入社前にいろいろなことを勉強しました。いろいろなところでいわれていたのは、「店が全然成長していない。もう飽和している」ということでした。特にドラッグストアです。コンビニの上にドラッグストアががががが出ています。ドラッグストアは飲料が安いではないですか、食料品もやっていて卵も売っている、納豆も売っている、いろいろなものが横にがががが出てきています。それから高齢化、少子化、加えて東京とか首都圏では外国人労働者がすごく増えています。いろいろなことを勉強してみると、これは相当大変だなと思いました。もう飽和してしまつて競争激化で他業種とも大変なことになっています。これは大変なことだし、ちょっとやそつとではうまくいかないと考えていました。

それにもかかわらず、2016年に私が入社したときには、店舗をもっと出すと言っていたのです。ファミリーマートは1200店、セブン-イレブンは1800店、ローソン1160店を目指して、飽和しているにもかかわらず店舗をまだ出すぞと言っていたのです。私は正直、狂っている、異常だ。こんなことをやっていたら誰も幸せにならないと思いました。そして、これは大胆に構造改革をして会社をつくり直す必要があるなと思いました。量ではない、店舗を出すのではなくて一店舗一店舗の質、商品の質、サービスの質、加盟店さんの質を全部上げなくてはいけない。当然、これは私一人では絶対にできない、全社員の力を結集しないと絶対にできないと、本当に強く思いました。一丸となって取り組まない限り、絶対に不可能だと思いました。そして2016年9月、4社が統合しました。ユニーが統合し、ファミリーマートホール

ディングスができて、私がファミリーマートの社長に着任しました。

私は着任後、4大テーマを掲げました。一つ目は、一つにならなくてはいけないということです。今日もこれだけの皆さんがいらっしゃるのですが、例えば1本の線を境に右と左で違うことを考えていたら、同じゴールには絶対に行けません。ただし、皆さんが同じ方向を向いて、いろいろあると思いますけれども、この人が言っていることは正しいということので力を合わせれば、すごいパワーが出ると思います。右と左に分かれて違うことを言っていたら絶対にうまくいかないです。だから一番大事なのは「One FamilyMart」です。一条乱れず一つになるのだということです。いろいろな会社が統合してきたのですが、一つになるのだというのがまず1点目です。

二つ目は、ファミリーマートが正しいとか、サークルKが正しいとか、サンクスが正しいとか、am/pmが正しいとかというのは絶対に違う。社長が正しいのでもなく、誰が正しいのではない、“何が正しいか”、これが2番目です。

三つ目は、生産性の向上です。要は、一人の人が売上利益をどんどん上げれば、絶対にもうかります。生産性が下がるとどんどん利益は食われます。

もう一つ、それをやろうとすると、無駄なことをやめるのです。やらなくていいことはやめるのです。今やっていること、今取り組んでいることは未来に本当につながるのか、本当にこれはやるべきなのかということを考えるということです。

この四つだけは絶対に守れと宣言して、具体的な目標を掲げて、誰よりも圧倒的に仕事をする、誰も文句を言えないくらい仕事をする、それで短期間に結果を出す（背中を見せる）ということ肝に銘じて仕事を始めました。

先ほど言ったとおり、am/pmが2010年に統合して1100店、2015年にココストアが統合して650店、2016年にサークルKサンクスが統合して6300店、こんなにいろいろな会社がかっついてばかりいるのです。全部企業文化が違います。リーダーも違います。だからぐちゃぐちゃだったのです。多分、中身はぐちゃぐちゃだろう、いろいろなルールも全部、人事制度から何から全部ぐちゃぐちゃになっているのだろうと推測していました。これは大変だろうなと思って、全部白紙で見直す覚悟でやりました。そのためには加盟店さんと徹底的に話をする、社員と徹底的に話をする、学ぶことが大事だということやらせていただきました。

そして、現場に出ました。私は3週間現場に出て、店長資格を取りました。店長資格試験には2回落ちたのですが、3週間現場に出て店長の資格を頂きました。あと、



本部のミーティングにもいっぱい出ました。みんなが会議をしている末席で、「何でこんなことをやってるんだろうな」「これは未来につながってるのかな」と、言いたいことはいっぱいあるのに我慢して聞きました。先ほど言ったとおり、現場ではつながらないことをいっぱいやっているのです。なぜこんなことをやっているのだろうということがいっぱいありました。それから、加盟店さんには行くとたびに文句を言われました。「最近のキャンペーンはなってねえ」とか、「このくじはどうなったんだ」とか、「レジが使いにくい」とか、もう文句の嵐で、うわーっと言われました。いっぱい言ってくださいました。感謝、感謝です。彼らが言ってくれなかったら全然分からない。いっぱい学ばせてもらいました。

見えてきた課題です。イトーヨーカドーではないですが、どこを向いているのか、お客さんを見ていないということです。何店舗出店するとまず決めるので、何店舗出すために仕事をする。そうするとお客さんではなくて上を向いてしまう。店舗を出すことが目的化してしまうのです。規模の追求が目的化してしまうのです。そうではないのではないか。やはりお客さんの方を向かなくてはいけない、これはやばいな、相当直さないといけないと思いました。

次の課題は店舗運営力です。同じ店でも加盟店さんの質によって全然レベルが変わります。素晴らしい加盟店さんは、お客さんが入って来た瞬間に「山田さん、田中さん、今日も元気だね」「おばあちゃん元気ですか」と言うのです。駄目な店舗は挨拶をしません。全然違います。やはり高質な運営を実現しなくてははいけません。素晴らしい加盟店さんがいれば、素晴らしい運営ができます。素晴らしい加盟店さんを増やすためには、加盟店さんが本部を尊敬して、よくやってくれた、よく変えてくれた、よくこんな商品を作ってくれた、こんなに簡単になった、オペレーションが楽だと言ってもらえることをやっていかなくてははいけません。

そして地域密着です。今日も皆さんいろいろな所からいらっしゃっていると思うのですが、ファミリーマートは全国にあります。全国にあるファミリーマートは、本社で採用された人が行ってやっているわけではありません。その地に根付いた人、そこで生まれ育って生活している人が経営しているのです。地場に密着しているのです。地場に密着するということは、極端な規模を追求してあっちに行けこっちに行けというのではなくて、丁寧に地場を理解して地場のために尽くす、そういうことをやらなければいけないのです。ところが、市場ニーズと乖離した出店ばかりしてきたのです。それによって、本部の社員も異動します。北海道で500店出すぞとなると、北海道に人がばーっと思うのです。沖縄だ、九州だ、

四国だと、ばんばん異動するのです。落ち着かないですよ。そして大体単身赴任です。出店ばかりしていると地域に全く密着しない、地域密着と言っているけれども全然有名無実化している。これはやばい、全部打破しなくてははいけないと思いました。

そうして見えてきた課題を解消するためには、絶対にお客さんの方を向かなくてははいけません。もう一つ、お客さんの方を向いてくださっているのは本部の人間ではないのです。加盟店さんです。加盟店さんを幸せにしない限り絶対には駄目です。量より質、加盟店さんの幸せが結果的にお客さんを幸せにする、こういう意識改革が急務だと思いました。これを1人でも多くの関係者に言うしかない、言い続けてメッセージを出し続けて、私と同じ思いを持って行動してくれる人間を1人でも2人でもとにかく増やしていくしかない、一緒になってやるしかないと思いました。

そこで、社員、加盟店さん、取引先さんの三つに対してこういうことをやりました。まず社員に向けては、「俺の気合を注入するんだ!」「俺はこんなことを思ってるんだ」ということを、「気合注入講演会」と銘打って社員におちまけるのです。会社やいろいろなところでイベントをして、「気合注入講演会はこちらです」と書いてあると、取引先さんとかはびびってしまって、「気合注入って何、アントニオ猪木が来るんですか」と言うような、そういう会を企画して、全国13会場に行って今日のような感じで6000人を集めてしゃべり倒しました。もう一つはランチミーティングです。私は毎日一人でランチをしていたのですが、寂しかったので全社員とランチをすると行って、コロナでできなくなってしまったのですが、321回開催して2040名の社員とご飯を食べました。あと、こうなっている、ああなっていると毎月動画を配信しました。

加盟店さんに向けては、「感謝のつどい」を開きました。私が入る前は政策発表会と言っていたのですが、政策ではないだろう、年に1回加盟店さんとお会いできるのだから感謝しよう。今、私がこうやってしゃべっている瞬間も加盟店さんが営業してくださっているから商売





が成り立っているわけで、感謝するしかないだろうということで「感謝のつどい」と名前を変えました。コロナの前は3万660人の加盟店さんにご参加いただいて、私の思いを語りました。それからFamily座談会、いろいろなところに行って、売り場をベースにして加盟店さんからいろいろなことを学びました。あと、今でもそうなのですが、LINEで加盟店さんにつながって「社長、このキャンペーンよかったよ」とか「社長、これはおかしんじゃないか」などと、がんがんLINEをもらいました。今でも400名ぐらいにつながっていて、いろいろなことを言われています。

それから取引先さんに対しては、先ほどちらっと言いましたが、取引先さんから2兆円仕入れていますが、2兆円仕入れているメーカーさん1502社にご参加いただいて、ファミリーマートはこういうことが課題です。ただし、こういうふうにやりますということをお話して、いろいろな説明をしてきました。

とにかく一枚岩、一致団結、同じ方向に向かって頑張る、そういう環境づくりをすることが、一番大事だと思ってやりました。

ここから、改革の一例をお話しさせていただきます。

まず、店舗オペレーション改革です。ファミリーマートに行くときFamiポートというのがあって、それで例えばコピーを取ったりチケットを買ったりといろいろなことができて、メーカーさんから一部課金してもらったりサービスフィーとしていろいろなお金が入ってきます。皆さんからもコピーを10円で取っていただくと幾らか入るとか、いろいろなことをやっているのですが、今まではそういうことを始める場合、新規事業開発部というのがあって、そこが大体メーカーさんと交渉して作っていました。一方で、店舗オペレーションとあって、それをオペレーションする側、現場に入ってそれを教える人たちがいて、そういう人たちが加盟店さんに教えていきます。出店をがんがんやっていた頃は忙しくて、大して打合せができないままどーんと入れてしまうのです。そうするとどうなるかというと、ろくに教育されていない人間がいきなりサービスに入って行って現場が大混乱するようなことがいっぱいあったのです。

それが今は、導入する前には加盟店さんにも入ってもらってまず関係者全員で話をして、何店舗かでトライして、十分習熟した状態にして初めて導入していくという形に変えました。縦割りでやっていたものを全部横割りにして、加盟店さん中心の軸にしてサービスを提供していくというふうに変えていきました。現場第一主義です。

そこで、私は着任すると、加盟店さんにどんなことが問題ですかというアンケートを、年に2回取ることにしました。その結果、いろいろな文句を言われました。そ

れから、今までは加盟店からの相談を電話対応のみで受けていたのですが、フリーダイヤルにして13名の相談員を全国に配置して、年間2000店舗訪問して直接加盟店さんからお話を伺うような体制に変えました。さらに、加盟店ソリューショングループという専任部隊を新しくつくって、そこに専任の人間を配置して、加盟店さんから言われることを全部ヒヤリングして対応していくようにもしました。そして、毎月発行している加盟店向けの社内報『FAMILY』で「皆さんの声にお応えしていきます！」ということでその結果報告をしてコミュニケーションしてきました。

具体的にはこんなことをやりましたということ、三つお話しさせていただきます。

一つはPOSレジです。コンビニで働いたことのある方がいらっしゃったらご存じかもしれませんが、POSレジには年齢・性別キーというのがあります。レジは本当に難しく、お客さんによってQUOカードで払いますとか、カードで払いますとか、ポイントを使いますとか、いろいろあるのです。熟練している人はぱっぱと対応しますが、初めて入った人はQUOカードが分からないのです。学んではいるけれどもとっさに言われたり、あるいはポイントで払って一部現金で払いますとか、訳が分からないのです。

でも、この年齢・性別キーを押さないとレジが開かなくてお金を払えない、お釣りを出せないのです。それが非常に難しく、10代・20代とか男性・女性とかいろいろあるのですが、私は分からなくて怖くて、男性が来ようが女性が来ようが子どもが来ようが、いい加減に40～50代の男性という左の下のブルーのキーしか押していなかった。分からないですから。最近は何も分からないではないですか。だから、こんなに難しいことをなぜやらせるのだ、こんなことをやらせるのはナンセンスだと思いました。

一方で、私たちはTポイントでやっていました。Tポイントは男性も女性も全てデータが入っています。あれを見れば正しいことが全部分かります。5割の人がTポイントを使ってくださっていたので、実は全部分かるのです。ということで、これは廃止しました。ただ、廃止しろと言ってから、できたのが1年半です。大企業は時間がかかります。「取ったら幾らかかります」とかと言うので、「うるせえ！ 今日この瞬間だって大変なんだ、取れ！」と言っても、なかなか取れない。今はおかげさまで取れました。

それから、プライスカードがあって、「Mアーモンドチョコレート 221円」と書いてありますが、外国人の方がいるとカタカナが読めないです。チョコレートが読めない。そういう外国人が増えているにもかかわらずこ



れをががんやって、「本当に最近の外国人はカタカナが読めなくて困ります」と言っているばかりのほうがいいわけ。「ばかか、おまえは。絵を付けろ」と言って、プライスカードに絵を付けました。これは現場から上がって来たアイデアです。今ではこれを見れば誰でも付けられるようになりました。これだけでもどんと作業量が減りました。

それからマニュアルです。ココストア、サークルKサンクス、am/pmと、統合、統合しながら誰も整理しない。1000ページ以上のマニュアルです。1000ページも誰が読むのか。「おい、店舗オペレーションの常務、俺の前で読め、このやろう、読めるのか」「読めません、読んだこともありません」と。宅急便だけで100ページです。ばかかと思いましたが、そんなことが起こっていました。今は全部やめて、全部絵に変えて100ページにしました。いろいろなことをやってきました。

アンケートを取りました。どんどんオペレーションが楽になったと言われました。これは前から比べて良くなったということなので、おかげさまで今はすごく減りました。これはアンケートですから忖度も何もなくて、事実です。加盟店さんから、「よくやってくれた。今はすごく楽になった」と言われます。ただ、これは手を休めると一気におかしくなってしまうので、大改革をしています。

商品・マーケティング改革も、今までは形式上のプランをやっていたのですがこれも改革をして、きちんとした計画を作って商品と営業と打合せをして、そしてお店に伝えて実行していくというような体制に、マーケティングのトップを招聘して変えました。

そして大胆な構造改革、5003店舗展開したのですが、そのうち未来につながらない店ということで3300店閉めました。工場もいろいろな工場、おにぎりだけでも幾つも工場があったので、統合して120を92工場にしました。

そして人件費、これはなかなかやりたくなかったのですが、店を閉めたら売上が下がります。ですから1000人以上の方に早期退職ということでお辞めいただきました。ただし、退職金を倍積んで、希望の人だけに辞めていただくということでケアをして、退職金を払って辞めていただきました。

そして物流拠点も減らしまして、改造改革を大胆に実行しました。

それから海外です。日本のコンビニエンスストアが一番優れていると言われて海外に出ていったのですが、私が海外に行っているいろいろな店を見て思ったのは、圧倒的に競争力があるということです。何かというと、えらい安普請なのです。それで扱っている物は、現地の物を

買って現地の物を売っているのです。ファミリーマートは、ほとんど同じものを売っているのに高い店で売っている。勝てるわけがありません。利益率は同じなのに、一つは損益分岐点がものすごく低くて、もう一つは高いのです。勝てるはずがありません。ということで、フィリピン・タイ・インドネシアを売却しました。今は中国・ベトナム・台湾・マレーシアだけに注力して実行しています。

環境整備ということでは、社員と話をして、いろいろなことを学びました。一つは持ち家制度です。持ち家の人が転勤する場合は9割会社が負担するのです。賃貸の場合は5割負担します。9割負担する人と5割しか負担しない人がいる、社員によって違うのはあり得ないということで、間を取って7割だと。今は全部7割になりました。

それから社有車、ファミリーマートとかセブン-イレブンは、車の横にロゴが付いていますが、これをやめろと言いました。ファミリーマートのロゴの付いた車では、セブン-イレブンに行けないのです。競合調査ができない。セブン-イレブンにファミリーマートのロゴの付いた車が止まっているのはおかしいではないですか。「ステッカーを取れ」と言いました。なぜこんなことに気付かなかったのかということです。

あと、子どもの送迎です。例えば地方に行くと社有車と自家用車があって、自家用車でまず子どもを幼稚園に送って戻ってきて、社有車に乗り換えて店に出るということをしていました。でも、保育園が途中にあったら社有車で送って行って店まで行けばいいではないですか。何かあったら大変だということでこれがご法度になっていました。「制度を変えろ、保険をかける」と言って、全部これができるような制度に変えました。

それから、家族の近くで仕事がしたいという人は記入してもらえ。単身赴任は全部やめろということでこれも変えました。地域を知り、地域に暮らしということで、650名の人に帰ってもらいました。淡路島の場合はみんな神戸に赴任して、神戸から1時間かけて毎日通っていました。「アホか、淡路島に住みなさい、根付きなさい、べたべたになりなさい」と言いました。当然ですが走行距離は半分になりました。店にいる時間が倍になりました。売上は普通の店に比べて7.5%増えました。やればできるのです。ががん地域密着をやりました。

そして、身だしなみルールを変更してカジュアルにしたり、社内コミュニケーションを取れるようGoogleさんと組んで動画や映像を送れるように全部作り直しました。本社も移転して階段で移動できるような環境をつくりました。いろいろなことをやって、いろいろなアワードを頂きました。



それでも劇的に変化するコンビニを取り巻く社会的な課題ということでお話ししたいと思います。いろいろなことをやってきたのですが、劇的に環境は変わるのです。新型コロナの感染拡大、地政学リスクの拡大、物値の上昇、あと、コンビニはオーナーさんをいじめているのではないかと、24時間営業は本当にいいのかということ、経産省や公正取引委員会など、いろいろなところに随分呼ばれました。それでいろいろなことが変わります。変わったことに全部に対応してきました。私が経営をやりながら思ったのは、一番大事なやはりダーウィンだなということです。強い種や賢い者が生き残るのではなく、変化に対応できる者が唯一生き残ることができる。今この瞬間もいろいろなことが変化しています。この変化に対応していくことが全てにおいて大事であるということ、肝に銘じて仕事をしようと思いました。

次です。ファミリーマートの「強み」は、この瞬間も365日24時間、加盟店さんはやってくださっていることです。そして、家や職場から近いこと。そして1500万人の方が実際にお買い物をしてくださっていることです。コンビニってすごいのです。毎日1500万人がファミリーマートで買い物をしてくださっています。

そういうところで、落合さんという人と組んで、コンビニエンスウェアというものを作りました。靴下がばか売れました。キムタクと組んだりしてすごく売れました。

そして、地域異常密着ということで、子ども食堂をやったり、フードドライブとあって、皆さんの家でも賞味期限までに食べ切れない食品があると思います。そういうものを近くのファミリーマートに持って行っていただいてボックスがありますのでそこにに入れていただくと、地域のいろいろな方が取りに来て恵まれない人にお届けするというようなことをやっています。あと、振り込め詐欺とかいろいろなことを阻止しようということで今、加盟店さんといろいろやっています。特殊詐欺の防止活動も警察と組んでやる、要は地域に貢献するということを実行しています。

日本郵政さんと組んで、日本郵政さんは2万3000拠点、ファミリーマートは1万6000拠点ということで4万拠点、



60万人が働いてくださっています。こういうところと組んでもっともっと地域に貢献しようということで一緒に仕事をさせてもらっています。郵便局の中に無人の店舗を開いたり、近くのファミリーマートのオーナーさんにもものすごく田舎にある郵便局に物を届けてもらって売るといことも、去年の10月からスタートさせてもらっています。

デジタルシフトということでは、無人化やロボットを使ったりということも実行させてもらっています。

その結果、私が社長を退任してから、おかげさまで会社に比べると数字はずっといいです。私が社長を辞めてからずっといいです。いかに私の出来が悪かったかということです。ただ、会社というのはコンシステシーというか永続なので、すごくいい結果が残っているということで非常にうれしく思っています。

最後です。ようやく最後になりました。要は、やりたいことをずっとやってきました。ファミリーマートでもいろいろなことをやりました。自分を信じて、いろいろな人にご指導いただいて、これがやりたいということを実行してきました。やりたいことをやるというのは、わがままではないのですが、自己責任だと思います。これをやるぞと宣言してやるということは、自己責任を負うということだと思います。逃げ場をなくす、トップというのは逃げられないです。隠れられないです。トップは絶対にやはり責任を取らないといけません。納得して努力する。私はそれこそが自己成長を生んでいくと思います。こういうつもりでずっとやってきました。これからもやっていきたいと思っています。

最後に、リーダーとしての使命、なすべきこと。今日もいろいろな組織のリーダーの方がいっぱいいらっしゃると思うのですが、私はまだまだできていないです。これからもいろいろなことで暴れたいと思っていますが、組織というのはリーダーによって99.9%決まると思っています。組織のリーダーが暗い顔をしていたら、絶対に暗くなります。愚痴をこぼしていたら、絶対に愚痴をこぼす組織になります。元気な組織は絶対にリーダーが元気です。リーダーが99.9%を決定すると肝に銘じたいと私は思っています。

お客さま、加盟店さん、取引先様、社員。私の仕事は、1人でも多くの人を物心両面で幸せにすることです。そう肝に銘じてこれからも頑張っていきたいと思っています。繰り返しになりますが、最後にコンビニエンスストアは「あなたとコンビニファミリーマート」、こちらをご利用していただけるよう切に切にお願いして、私の講演とさせていただきます。ご清聴誠にありがとうございました。

第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

閉会式(8月26日(金))



九谷焼

いしずえ
輝く未来への礎
～親から始める新時代の教育～



一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長

やまだ ひろあき
山田 博章

最後の最後までこの会場に残っていただきました皆さん、こんにちは。そして、ありがとうございます。また、映像をご覧の皆さん、見えていますか。最後の閉会式までご覧いただきありがとうございます。2日間にわたり、大変お疲れさまでした。昨日の馳県知事の挨拶にもありましたように、開催に当たって紆余曲折と勇気のある決断を経ての今があります。今大会の企画・運営に尽力された実行委員会の皆さん、そしてご協力いただいた石川県高P連の皆さん、コロナ禍ということでいつも以上にさまざまな気苦労があったかと思えます。しかしながら、そのおかげをもちまして今大会がこのように盛会に成功裏に終えることができますことを、心より感謝申し上げます。

私は、この金沢の地で2泊させていただきました。連日、石川のおいしい海の幸やおでん等々を堪能させていただきました。

た。時間の都合上、金沢市から遠出することはできませんでしたが、兼六園や金沢城、そして少し足を伸ばすと能登・輪島など、魅力あふれる場所がたくさんあります。どうか参加された皆さんも、本日の午後もしくは明日、明後日と、時間の許す限り観光に立ち寄られて、多くのお土産、多くのお土産話とともに本大会での研修と気付きを各単Pに持ち帰り、明日からのPTA活動に活かしていただけますよう切にお願い申し上げます。

また次回、来年度の全国大会は宮城県で開催されます。来年度も本年同様、もしくはそれ以上に多くの方々に参加いただき、PTA会員のより一層の親睦が深められますよう切にお願い申し上げます。私からの閉会の挨拶とさせていただきます。皆さん、本当に2日間、お疲れさまでした。ありがとうございます。



第72回全国高等学校PTA連合会大会宮城大会実行委員長

まち だ 町田 さやか

皆さんこんにちは、来年度開催県の宮城県高等学校PTA連合会です。私は、宮城大会の実行委員長の町田さやかと申します。よろしくお祈りします。ただ今の曲は、仙台市出身のロックバンド、ハウンドドックの「フォルテシモ」です。現在、JR仙台駅の発車メロディに使用されています。宮城大会が盛り上がるよう祈って、拳を突き上げたくなるような元気のでる曲で登壇しました。

さて、2023宮城大会は、来年8月24日、25日仙台市で開催の予定です。仙台市は皆様ご存じのとおり、伊達政宗の城下町から発展した街まちです。仙台藩では城下の武家屋敷に樹木の植林を奨励したので、お寺や神社の林、広瀬川河畔や青葉山の緑が一体となって杜の都と呼ばれるようになりました。その後、仙台空襲で焼失しましたが、

戦後の復興でけやき並木などの整備が進められ、現在も緑豊かな街となっています。

その仙台市で開催する2023宮城大会のメインテーマは「豊かな杜につむぐ虹の光」、サブテーマは「しなやかな強さで生き抜く力」です。震災を経験しコロナ禍で生きる高校生が様々な困難に負けることなく強くしなやかに成長できるよう保護者が手を取り合っていけるよう皆様に考えていきたいと思っています。

来年はコロナも収束し、多くの会員の皆様に参加いただけますよう期待しております。それでは、最後に、仙台のご当地ソング、さとう宗幸さんの「青葉城恋歌」で退場します。

来年の夏は、宮城県仙台市でお会いしましょう。



第71回全国高等学校PTA連合会大会石川大会実行委員長

あわだ
栗田

まさと
真人

2日間にわたり、最後の閉会式のこの時間まで残っていただいた皆さま、そしてオンライン配信でご覧いただいている皆さま、今回のご参加、誠にありがとうございます。

昨日、知事や市長にご挨拶いただいた際にも、お二人とも開催自体が英断だという評価を頂きました。まだまだ世の中の的にはこういった集うという形での全国大会を開催することについての世間的な抵抗感というものがまだまだあるということの証拠なのだろうと思います。この大会を契機にそういった閉塞感を払拭して、各地のPTA活動が元どおりになっていくきっかけになる大会にしたいと願って、今日まで運営させていただきました。恐らく今後も昨日、今日の天候のように曇りっぼい感じでちょっと雨が降ったりして、すぐに晴れというわけにはいかないのでしょうけれども、今後明るい未来への礎を背に、皆さんの活動の一助になればいいのではないかと考えています。

そして昨日からたくさんの方に分科会、記念講演でご登壇いただいて、多くの学びの機会を得ることができました。まずそのことを感謝したいと思います。

それから、現役の高校生にも今回はたくさんご協力いただきました。四つのアトラクションを開催していただいた各校の部活動の皆さま、それから国歌独唱という非常に緊張を強いられるような場面を見事に担っていただいた辰巳丘高校の坂さん、そして会場のバックではありましたが金沢商業高校の生徒の方々に物産展に協力いただきました。夏休みの本当は遊びたいかもしれない時期に、2日間、われわれのために時間を割いていただいた高校生の皆さんにも、直接この場では言えませんけれども、感謝の気持ちを申し伝えたいと

思います。

あと、手前みそではありますが、今回運営していただいた石川県高等学校PTA連合会のメンバーの皆さま、本当にご協力ありがとうございました。何よりも実行委員会が立ち上がったのが令和になる前の平成30年です。そのときの役員の皆さまが実はこの大会の本当の中心メンバーです。四つの部があるのですが、各部の部長として私よりも先にお子さまが卒業された、OBになられた方々がそのまま実行委員会に残っていただいて、各四つの部の責任者として本当に裏方で活躍していただいています。私は挨拶要員のような形の実行委員長で、裏方で本当にいろいろなご苦勞をしていただいているということで、4人の部長様、そして何よりも事務局のお二人の職員の方のこの4年間のご苦勞を、本当にねぎらいたいと思います。

来年は宮城の皆さまにこの大会を設営していただくということで、本当に楽しみにしています。今日もたくさんの方のPR隊の方に石川県までお越しいただきましてありがとうございました。仙台藩、伊達藩、ここは加賀藩、百万石の前田家なのですが、前田家から伊達のお殿様の地元にバトンタッチをするということで、江戸時代のどちらかという雄藩、外様大名同士、そういった歴史も感じながらバトンタッチさせていただきたいと思います。

実は実行委員会の皆さんから、実行委員長はこの場で泣けと言われていましたが、残念ながら泣けませんでした。すみません。お詫びを申し上げまして、閉会の辞とさせていただきます。本当に2日間、皆さまのご参加、そしてご協力、ありがとうございました。

第71回全国高等学校PTA連合会大会 石川大会

資料



那谷寺

いしずえ
輝く未来への礎
～親から始める新時代の教育～



参加申込者数

第1分科会				第2分科会				第3分科会				全体				オンライン申込			
地区	申込数 地区単位	県名	申込数 県単位	地区	申込数 地区単位	県名	申込数 県単位	地区	申込数 地区単位	県名	申込数 県単位	地区	申込数 地区単位	県名	申込数 県単位	地区	申込数 地区単位	県名	申込数 県単位
北海道	87	北海道	87	北海道	81	北海道	81	北海道	38	北海道	38	北海道	206	北海道	206	北海道	36	北海道	36
東北	185	青森県	43	東北	158	青森県	14	東北	69	青森県	9	東北	412	青森県	66	東北	89	青森県	11
		岩手県	41			岩手県	46			岩手県	23			岩手県	110			岩手県	21
		秋田県	21			秋田県	4			秋田県	11			秋田県	36			秋田県	8
		宮城県	45			宮城県	63			宮城県	13			宮城県	121			宮城県	13
		山形県	18			山形県	13			山形県	6			山形県	37			山形県	15
		福島県	17			福島県	18			福島県	7			福島県	42			福島県	21
関東	499	茨城県	80	関東	229	茨城県	48	関東	97	茨城県	12	関東	830	茨城県	140	関東	309	茨城県	32
		栃木県	26			栃木県	29			栃木県	0			栃木県	55			栃木県	45
		群馬県	112			群馬県	21			群馬県	21			群馬県	159			群馬県	48
		埼玉県	144			埼玉県	44			埼玉県	18			埼玉県	206			埼玉県	69
		千葉県	85			千葉県	38			千葉県	24			千葉県	147			千葉県	65
		神奈川県	33			神奈川県	14			神奈川県	13			神奈川県	60			神奈川県	34
		山梨県	8			山梨県	24			山梨県	9			山梨県	41			山梨県	7
		東京都	11			東京都	11			東京都	0			東京都	22			東京都	9
北信越	279	新潟県	35	北信越	527	新潟県	16	北信越	116	新潟県	10	北信越	1013	新潟県	61	北信越	135	新潟県	38
		富山県	42			富山県	45			富山県	18			富山県	107			富山県	16
		石川県	129			石川県	376			石川県	69			石川県	662			石川県	31
		福井県	48			福井県	66			福井県	9			福井県	124			福井県	23
		長野県	25			長野県	24			長野県	10			長野県	59			長野県	27
東海	579	岐阜県	95	東海	153	岐阜県	21	東海	191	岐阜県	35	東海	923	岐阜県	151	東海	147	岐阜県	35
		静岡県	155			静岡県	56			静岡県	45			静岡県	256			静岡県	23
		愛知県	284			愛知県	51			愛知県	82			愛知県	417			愛知県	55
		三重県	45			三重県	25			三重県	29			三重県	99			三重県	34
近畿	243	大阪府	29	近畿	117	大阪府	26	近畿	60	大阪府	11	近畿	422	大阪府	66	近畿	116	大阪府	11
		京都府	29			京都府	33			京都府	15			京都府	77			京都府	31
		滋賀県	57			滋賀県	20			滋賀県	19			滋賀県	96			滋賀県	19
		奈良県	33			奈良県	12			奈良県	4			奈良県	49			奈良県	13
		和歌山県	55			和歌山県	6			和歌山県	7			和歌山県	68			和歌山県	5
		兵庫県	40			兵庫県	20			兵庫県	4			兵庫県	66			兵庫県	37
中四国	188	鳥取県	8	中四国	138	鳥取県	25	中四国	66	鳥取県	8	中四国	392	鳥取県	41	中四国	121	鳥取県	12
		島根県	17			島根県	18			島根県	10			島根県	45			島根県	7
		山口県	16			山口県	6			山口県	15			山口県	37			山口県	6
		広島県	27			広島県	35			広島県	4			広島県	66			広島県	25
		岡山県	47			岡山県	34			岡山県	6			岡山県	87			岡山県	24
		徳島県	26			徳島県	1			徳島県	6			徳島県	33			徳島県	3
		香川県	25			香川県	14			香川県	14			香川県	53			香川県	17
		愛媛県	7			愛媛県	4			愛媛県	2			愛媛県	13			愛媛県	12
		高知県	15			高知県	1			高知県	1			高知県	17			高知県	15
九州	532	福岡県	152	九州	354	福岡県	83	九州	144	福岡県	39	九州	1030	福岡県	274	九州	123	福岡県	39
		佐賀県	53			佐賀県	54			佐賀県	19			佐賀県	126			佐賀県	9
		長崎県	60			長崎県	23			長崎県	12			長崎県	95			長崎県	29
		熊本県	64			熊本県	40			熊本県	9			熊本県	113			熊本県	16
		大分県	55			大分県	8			大分県	8			大分県	71			大分県	12
		宮崎県	55			宮崎県	28			宮崎県	23			宮崎県	106			宮崎県	5
		鹿児島県	34			鹿児島県	34			鹿児島県	12			鹿児島県	80			鹿児島県	8
		沖縄県	59			沖縄県	84			沖縄県	22			沖縄県	165			沖縄県	5
2592		2592		1757		1757		781		781		5228		5228		1076		1076	



実参加者数

第1分科会			
地区	申込数 地区単位	県名	参加数 県単位
北海道	76	北海道	76
東北	161	青森県	38
		岩手県	34
		秋田県	18
		宮城県	41
		山形県	13
		福島県	17
関東	434	茨城県	72
		栃木県	18
		群馬県	81
		埼玉県	137
		千葉県	79
		神奈川県	28
		山梨県	8
		東京都	11
		新潟県	32
北信越	267	富山県	42
		石川県	129
		福井県	46
		長野県	18
東海	451	岐阜県	64
		静岡県	118
		愛知県	228
		三重県	41
近畿	212	大阪府	25
		京都府	29
		滋賀県	51
		奈良県	25
		和歌山県	49
		兵庫県	33
中四国	181	鳥取県	7
		島根県	15
		山口県	16
		広島県	27
		岡山県	46
		徳島県	26
		香川県	24
		愛媛県	6
		高知県	14
		九州	484
佐賀県	44		
長崎県	56		
熊本県	59		
大分県	46		
宮崎県	49		
鹿児島県	34		
沖縄県	58		

2266

2266

第2分科会			
地区	申込数 地区単位	県名	参加数 県単位
北海道	80	北海道	80
東北	141	青森県	14
		岩手県	38
		秋田県	4
		宮城県	60
		山形県	7
		福島県	18
関東	201	茨城県	40
		栃木県	23
		群馬県	17
		埼玉県	41
		千葉県	33
		神奈川県	14
		山梨県	22
		東京都	11
		新潟県	16
北信越	519	富山県	45
		石川県	376
		福井県	64
		長野県	18
東海	134	岐阜県	19
		静岡県	53
		愛知県	42
		三重県	20
近畿	99	大阪府	23
		京都府	27
		滋賀県	17
		奈良県	11
		和歌山県	1
		兵庫県	20
中四国	118	鳥取県	23
		島根県	18
		山口県	6
		広島県	28
		岡山県	23
		徳島県	1
		香川県	14
		愛媛県	4
		高知県	1
		九州	334
佐賀県	49		
長崎県	17		
熊本県	40		
大分県	7		
宮崎県	28		
鹿児島県	32		
沖縄県	84		

1626

1626

第3分科会			
地区	申込数 地区単位	県名	参加数 県単位
北海道	34	北海道	34
東北	61	青森県	9
		岩手県	18
		秋田県	10
		宮城県	13
		山形県	5
		福島県	6
関東	87	茨城県	8
		栃木県	0
		群馬県	21
		埼玉県	15
		千葉県	21
		神奈川県	13
		山梨県	9
		東京都	0
		新潟県	8
北信越	113	富山県	17
		石川県	69
		福井県	9
		長野県	10
東海	160	岐阜県	20
		静岡県	43
		愛知県	69
		三重県	28
近畿	57	大阪府	11
		京都府	15
		滋賀県	18
		奈良県	4
		和歌山県	7
		兵庫県	2
中四国	58	鳥取県	8
		島根県	6
		山口県	13
		広島県	4
		岡山県	5
		徳島県	6
		香川県	13
		愛媛県	2
		高知県	1
		九州	135
佐賀県	18		
長崎県	12		
熊本県	8		
大分県	8		
宮崎県	23		
鹿児島県	12		
沖縄県	17		

705

705

全体			
地区	申込数 地区単位	県名	参加数 県単位
北海道	190	北海道	190
東北	363	青森県	61
		岩手県	90
		秋田県	32
		宮城県	114
		山形県	25
		福島県	41
関東	722	茨城県	120
		栃木県	41
		群馬県	119
		埼玉県	193
		千葉県	133
		神奈川県	55
		山梨県	39
		東京都	22
		新潟県	56
北信越	987	富山県	104
		石川県	662
		福井県	119
		長野県	46
東海	745	岐阜県	103
		静岡県	214
		愛知県	339
		三重県	89
近畿	368	大阪府	59
		京都府	71
		滋賀県	86
		奈良県	40
		和歌山県	57
		兵庫県	55
中四国	357	鳥取県	38
		島根県	39
		山口県	35
		広島県	59
		岡山県	74
		徳島県	33
		香川県	51
		愛媛県	12
		高知県	16
		九州	953
佐賀県	111		
長崎県	85		
熊本県	107		
大分県	61		
宮崎県	100		
鹿児島県	78		
沖縄県	159		

4685

4685

2022石川大会 編集後記

3年ぶりにリアルで開催された全国大会。石川県にお越しいただいた皆様、オンラインでご視聴いただいた皆様、本当にありがとうございました。

思い起こせば、平成30年、その時の県連会長と私を含む3名の副会長計4名に、県高P連の下根事務局長らを加え本格的な議論が始まりました。この4名は最終的に各部門長となるわけですが、最初は意思統一も難しく、大会の土台づくりにも時間がかかったものです。そうこうしながらも徐々に大会の概要も固まり、石川大会まであと一年半となった時に誰も想像し得なかった新型コロナウイルスのパンデミックが起きました。大会は一年延期となり、いつ終わるのかわからない感染状況の中、規模の見直しや感染対策など、いくつもの難問を抱えながらの日々…。とはいえ、準備を万端に整えながらリアルでの開催が叶わなかった島根県関係者の無念さを考えれば、私たちの苦労など大きな問題ではなかったと思っています。

このように何かと振り回された新型コロナですが、その恩恵がなかったわけではありません。特に実行委員会をオンライン形式で行ったことは、移動時間を大きく削減し、資料も電子化されるなど効率化を図ることができました。また全国大会をリアル&オンラインのハイブリッドで開催し、アーカイブ配信も行ったことで、より多くのPTA関係者に大会の内容をご覧いただけるというメリットも生まれました。一方で、全国大会を各県持ち回りで行うことの意義については、いろいろと考えることができました。

そういった中で強く意識したのは「いしかわの心を伝えたい！」ということ。北は日本海に突き出た能登半島、南には霊峰白山、そして加賀百万石の城下町。里山里海の自然が広がり、美術工芸や祭りなど伝統文化があふれる石川県。しかし寒風吹き荒れる冬はじっと耐えて過ごす…。そこに暮らす人々が長年育んできた「いしかわの心」を感じていただくことが、石川大会のテーマに込められた意味を伝えるとともに、ひいてはPTAの存在意義や全国大会の意義を考えるうえで、何かを感じていただけるのでは…と思いながら取り組んでいました。その思い、少しは届いたでしょうか？

最終的に新型コロナの感染拡大の影響もあって参加を断念された方がおられたのは残念でしたが、日本全国からPTAに携わる多くの方にお越しただけだったことは、開催県としても、また広報に携わる立場としてもうれしく感じました。ありがとうございました。

結びに、本大会の開催にあたり、ご支援・ご尽力をいただいた多くの皆様方に深く感謝申し上げますとともに、この全国大会のバトンを引き継ぐ2023宮城大会の成功と、今後のPTA活動の発展を心より祈念し、筆を置かせていただきます。

令和4年12月吉日

第71回全国高等学校PTA連合会大会石川大会
副実行委員長 資料・広報部長 漆原 慎

〈主催〉

一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町 2-1 奥田ビル 301 号
TEL 03-5835-5711 / FAX 03-5835-5757

〈主管〉

石川県高等学校 PTA 連合会

〒920-0918 石川県金沢市尾山町 10-5 石川県文教会館 2 階
TEL 076-232-1847 / FAX 076-232-1846

第 71 回全国高等学校 PTA 連合会石川大会は、多くのみなさまのご協力とご支援により、無事に終えることができました。

更に、みなさまの温かいご理解とご指導により、「会報」を作成することができました。改めまして、関係者のみなさまに深く感謝し、御礼申し上げます。

印刷・製本 能登印刷株式会社



第71回
全国高等学校PTA連合会大会
2022石川大会